神敎地……テスプロチア (Thesprotia)
熊襲……ペロポンネーソス (Peloponnesus)
荷持田村……スチンファロス (Stymphalos)
松峽宮(松浦)……オソエ (Oxoe=Matura)
御笠……コルナ(Coryna)
層增岐野……アザニア？(Azania？)
山門縣……オリムプス (Olympus)
田油津姬……ツリフリア (Triphlia)
火前國……エリス (Elis)
玉島ノ里……マーガレー (Margalae)
裳の絲……ペーネウス (Peneus)
儺縣及び儺河……ヘローピア (Hellopia)
迹驚岡……ドドナ (Dodona)
裂田ノ溝……トマルス山 (Tomarus)

伊都……イドメネ (Idomene)
和珥津……ワニツア (Vonitza)
蚊田……カラドラ (Charadra)
宇瀰……アムヒロキ (Amphilochi)
對馬島……コルキラ島 (Corcyra)
銀ノ水門……コルキラ港 (Corcyra)

伊太利

「美女の眉ノ國」……カラブリア (Calabria)
「飛廉」……ヤピギア (Japigia)
「陽侯」……リウカ (Leuca)
「海中の大魚」……チレヌム海 (Tyrrhenum)
「潮浪」……サレンチニ (Sallentini)
「天神」……ルカニア (Lucania)
「地祇」……アガー・ブルチ (Ager Bruti)

「天運盡きて」……アプリア(Apulia)
「海となる」……ウンブリア(Umbria)
「醒めて」……サムニウム(Samnium)
「素旆」「素組」……タスカン(Tuscan)
「面縛」……ラチウム(Latium)
「圖籍を封じ」……ヒストリア及びリブルニア(Histria, Liburnia)
「叩頭して」……カムパニア(Campania)
「船柂を」……ベネチア(Venetia)
「密かに」(百濟)……キウトロネス(Centrones)
「伺ひ」(高麗)……ピケヌム(Picenum)
古癸津……リグリア(Liguria)
阿利那禮河……埃及のナイル河(R. Nile=Eridanus)
栲衾王……タークイヌス・スペルブス王(Tarquinus Superbus)
宇流助・富利知干王……ルシオス・プリシカス王(Lucius Priscus)

波沙寨錦王……アンサス・マーキウス王(Ancus Marcius)
後葉の印……ポルタ・オスチエンチス(Porta Ostientis)
蹈鞴津……タレンツム(Tarentum)
卓淳……トスカン(Tuscan)
此自炅(比自炅は誤)……シシ・ポ(Cis-Po)
南の加羅……アルペス・ガリア(Gallia Alpina)
喙國……トルクイニ(Tarquini)
南蠻……アルペス・ガリア(Gallia Alpina)
忱彌……タウリニ(Taurini)
多禮……リビキ(Lybici)
比利辟中……ヘルベッチイ(Helvetti)
布彌支……ポエニナ(Poenina<Phoenici)
牟古……ベノスタ(Venosta)
辟支山……バギエンニ(Bagienni)

古沙山……コッチアイ山(Alpes Cottine)

谷那鐵……コグナテス(Cognates < Cognatus > Cognno)

第十二章　七曜は日本神名の紀念なる事。並に日本人と北歐人との關係

(一)水曜、木曜、金曜—應神、仲哀、神功

北歐の神

一　水曜、木曜、金曜—應神、仲哀、神功

豐浦(仲哀)、神功、應神三天皇の御諡號は、吾人をして、其發音の同一なるより、北歐古代の神たるトール、ジンゴー、オーヂンを想起せしめ、

豐浦天皇は Thor なり

神功皇后は Jingo 或は Jangoikon なり

應神天皇は Odin なり

との感を起さしむ(第一卷に說明せり)。然りと雖、是れ果して偶合なりと謂ふべきか。或は關係ありて、同一なりと謂ふべきか。余は其同一を唱ふる

是等諸天皇の諡名は日本古語

者なり。何となれば、豐浦、神功、應神の三天皇打揃ひて、北歐古代の尊信する所の三大神の名稱と一致するが如きは決して偶然と謂ふ可からず。(二)又其男性女性の一致あり、(三)神性の一致あり、(四)其他之れに關聯する歷史的事變及び其性質の一致ある等、決して偶然なりと言ひ去る可からざるものあればなり。

其歷代諸天皇の御諡名は、何が故に漢字的のもの、漢語的のものを以つてするかは、今は此に論ずることを爲さゝる可しと雖、又た是れ必ずしも漢字的漢語的—支那的起原のものに非るを認むべき理由あるなり。何となれば、今の支那人も、太古は西洋に居りしものなるが故なり。余は今こゝに凡ての御諡名を研究せる者に非ずと雖、唯、仲哀、神功、應神の三天皇の御諡名に就て、意味深遠勇壯無比にして、嚴肅なる日本古語を以つてせるを發見し、決して、極東に於ける支那起原に非ずして、太古的のものなるを知り得たる者なり。素より、他の諸天皇の御諡號に於ても其然るを感せるものありと雖、今は唯、右三天皇に就てのみ研究することゝ爲さん。而して余は一發見を

仲哀天皇の御名

海上權力者

仲哀と「チカ」

爲す毎に太古の日本人の世界的大國民たり、日本歷史の最も宏遠にして、偉大なるを感ずる者なり。

仲哀天皇—足仲彥天皇、仲哀天皇と諡す。足仲彥とは、意ふに Gadaraos 即ち「海上」と NAUKRATOS「權力者」との合成なるが如く、即ち「海上權力者」を意味せるものゝ如し。乃ち「タラシオス」は「タラシ(足)」となり「ナウクラ」は例のr音を脫落して「ナカ」と爲り、合成して「タラシ・ナカ」と爲るべき言語なればなり。

然るに其御諡名の仲哀に至つては、一方には雄壯無比のものあると同時に又た一方には悲哀の意味あるものゝ如く思はるゝなり。其悲哀の方面の意味を考ふる時は、前述「アラナ」即ちアポローンの子たるリノス神話の悲哀に當る所の「哀」の字を有し給へるを見るなり。元來リノスとは春時の若かやかなる生々の氣が、仲夏犬の日に當りて太陽の炎熱に由りて夭折することゝして表はされたるものにして、此リノスの爲めに悲哀の情を發表するなり。而して其「仲哀」の御名の漢字もて表はせる方面は此く悲哀なりと雖、此天皇又豐浦宮の別名なり、豐浦とは Thurn を以つて語原と爲せる如き

「木」

神功皇后の御名「神功」は好戰の語と同一となる

息長足姫は「海上迅速有力者」を意味す

に考ふる時はスカンヂナビア人の尊信する所の Thor 神なる如し。而して木曜日、英語 Thursday は Thor の日なるは既明の事實にして、豐浦宮は Thurs = Thor なりとせば仲哀天皇は木曜日を以つて紀念せられ給へるなり。其之を木曜日と爲すは、希臘神話に於ては、仲哀天皇に當る所のアラチの神は草木專ら樹木の神 Cephious (Κέφιος) なるが故なり。

神功皇后—氣長足姫(息長帶姫)天皇諡して神功皇后と申す。意ふに神功とは歐米諸國民が「戰爭主義」を表はす所の Jingo なる言語に當れるものゝ如し。之を證明せんには、先づ皇后の御名、及び西征に當りて示現し給へる諸神の神性を研究するを要す。皇后の御名「氣長足姫」なる支那文字は、單に發音の假字にして、何等生命延長等の意味は之れ無きが如し。前きに仲哀天皇の御諡名は足仲彦と申し、海上權力者を意味せりと解したるが、皇后の御名亦海上に關せるものゝ如く、余は之を希臘語「迅速」を意味し、又た「海洋」を意味せる所の ωκυς (ヲ。キ)と「海上優力」を意味せる ναυπρατος (ナ。カ)と、「海事熟練」を意味せる所の βαλλανος (タラシ)との數語より結成せる所の Ωκυναυπρατοβαλλανος

天疎向津姫は「不破直進刀劔姫」

本代主ノ神はアポローン

姫の御名と解するものなり。而して右結成第二語「ナウクラ」は「ナウ」を「ナ」と爲し、又た例のェ音を無聲ならしむる時は「ナカ」の發音を得可きなり。且つ應神天皇の御名に伊奢沙和氣なる海事上の御名(後に論ずあるに考ふるも、神功皇后の氣長足姫の御名を以つて「海上迅速有力者」の意味に解するも誤なきが如し。

皇后が西征し給はんとし給ふ時、示現し給ひし所の神々は第一天照大御神にして、自ら神風の伊勢ノ國、百傳度會ノ縣の拆鈴五十鈴ノ宮に居る神名は撞賢木厳之御魂天疎向津姫命と名乘り給へり、是れ撞賢木(月桂樹)を持ち給ふ所の直進邁往の稜威の御魂にして、不變突進の女神を意味せるなり。其「天疎」とは發音の假字にして Amatsukaze の訛りしもの、即ち直進不轉退を意味し、「向津姫」とは mukaitsu 即ち「刀劔」を意味せる語の例のェ音を無聲にして、「マカヒツ」となり、ムカヒツ(向津)姫と訛りしものなり。(一書の「向匿男」と同語。第三編第七章八節に說明あり)。又事代主ノ神も示現し給へり。—

事代主神—天に事代、虛に事代玉籤入彦厳の事代主ノ神なり。事代とは希

「ジンゴイズム」の語の起原は「神功」

臘語カタシロ(*xaro-ai'pa*)にして城を陷し、國を屠り、以つて捷利するを意味す。希臘語「カタシロ」は羅典語「コンピロ」(Compilo)にして、吾人の熟知せる所の琴平の神なり。今若し *xaro-aipa* の「シロ」のみに就て謂ふ時は、又た是れ「シュラ」と轉し、修羅、阿修羅の神たるなり(Syria, Assyria)。又た謠曲には代主とあるは此神なり。即ちアポローンなり。又た—

住吉の大神—も示現し給ふ。是れ海上有力の大神たり、又た刀劍の神たるなり。

是等示現の神々の性質は蓋く神功皇后に宿りませり。而して是等の神性を察するに皆是れ武勇戰鬪及び海上の神々にして、實に皇后西征の大業を助成し給ふに相應して、又た是等の諸神の憑り給ひし所の氣長足姫命の如何に勇壯なるかを知る可きなり。

是に於てかジンゴー(Jingo 神功皇后の御諡名は最も適當せるものと謂ふ可し。何となれば皇后素より聖略神功ありて神功の御名に當り給ふと雖、又た支那字の意味を離れて、單に發音のみより謂ふ時は、實に是れ戰爭の神、西洋所傳の Jingo 女神なる可し。西洋の諸學者は此神を以つてイスパニア古代のバスク人種の「神」を意味せる語なりと說明せりと雖、其實埃及日本の歴史上の大女王なるを知らざるなり。歐米諸國に於て戰爭主義を表はすに當り、Jingoism の言語を以つてするは、實に此女皇の御諡名に出でしものたるなり。此ジンゴーの神は、或は又た Jinkon と謂ひ、又 Jangoikon と謂ふ。其後者の如きは大に「神功皇后」の發音に近くして、太古既に「神功」の御名は之れ有りしを示めすものと云ふ可く、又た以つて後世支那的に諡名せしに非るを知るなり。

皇后は「金曜日」に於て紀念せらる

神后皇后は七曜中金曜日即ち英語の Friday の Fri- の神に當り給ふものの如し。此神アングロ・サクソン語にては Frige 古高獨逸語にては Fria、氷洲にては Frigg と謂ひて稍羅馬の Venus 女神と同一視さるゝ神なり。其「フリ」なる名稱あるに基いて考ぶるに、其綴字に於ては少異ありと雖、是れ羅典系の Furia 即ち忿怒復讐の女神に當れる如く、古獨逸の此神名の綴字 Fria に比較する時は僅かに「ロ」一字の有無の差異あるに過ぎざるなり。然りと雖

「ヨウメニテー」或は「フリア」

「フリア」より英語金曜日「フライデー」の語出つ

此日の一種恐るべしき日なる理由

此くの如きは言語の轉訛上殆ど不問に附するとも可なるの差異のみ。又其性質に考ふるも殆ど同一にして、皇后の新羅王の傲慢暴戾を懲戒し給ひし行爲は、全然Furia女神の神性に合せりと謂ふ可く、又た是れ希臘のエリネス(Erilyes)と同一神にして、ラスキンが此女神を稱して『神秘にして恐る可く、而も美麗なり』と謂へるも、フリア、エリニエ及び神功皇后に於て眞に合致せるなり。

是に於て余は神秘、猛烈美麗なる Furia 女神を以つてチュートン人種の所謂 Fria 女神と同一なりと解し、Furia に當り給ふ如き此女神の日は即ち神功皇后の日なりと考ふるものなり。殊に氷洲人が Frigg(即ち Frig=Furia)女神を以つてオーヂン(Odin)神の妻なりと信ずる所の彼等のオーヂンの神は日本の應神天皇に當る可く、夫妻と母子との關係は異れりと雖尚ほ「オーヂン」と「應神」との關係に於て、フリア女神の神功女帝に當ることを想はざるを得ざらしむ。

此くの如き種々の材料に據り、余は七曜中の Friday 即ち金曜日は神功皇

『金』

應神天皇の御名

譽田殿類を意味す

后の日なりと斷定するなり。且つ此日は歐州諸國に在つては一種恐懼あるの日となせるは、悠々以つて吾人の言に意味あるを證し、皇后の御稜威の紀念たるを示めすものゝ如し。而して其御稜威は幾千年の上より今日に及び、極東の島國より極西の歐米までも其名聲の傳はれるはあゝ又た大なるかな。

其、此皇后を金曜日に配するは、神功皇后は、比較神話に於て Venus 女神に當りまし、ベヌスは『金色』を以つて記號と爲し、星に在つては、金星たるに見ても知るべきなり。

應神天皇—譽田ノ天皇、氣比の大神と御名を交換し給ひて伊奢沙和氣天皇と申し、應神天皇と謚す。「應神」とは北歐古代の人民の信仰したる軍神 Odin に當り給ふものゝ如し。

譽田ノ天皇—とは意ふに食物に關する名稱にして、希臘語 Χόνδρος「穀類」を意味する語に出でゝ「ド」音を無聲にせしものゝ如し。古事記に據る時は、此名稱は始め此天皇の御名なりしも角鹿の氣比の大神に參詣し給ひし時、大神

伊奢沙和氣は海上搖搖の意味す

『水』

應神はオーヂンの神

の請に由りて御名を交換し給ひ、是より伊奢沙和氣の天皇と爲り給ひしものゝ如し。日本書紀の言へる所は之れと反對なりと雖、古事記の記事正當なるが如し。何となれば—

伊奢沙和氣—とは *Isaiwaua* (*aiyos*) に出でし名稱なるべく「イサリュサ」の發音中より例の「リュ」音を脱落する時は、こゝに「イサ、ゝ」、「日本語ゆさ〳〵」となる可し。是れ海上波浪に搖搖することを意味する語たり、又た仲哀天皇及び神功皇后の海上權力者たる意味の御名と其精神を同うせる點に於て、相調和せりと謂ふ可し。若し夫れ然りとせば伊奢沙和氣、天皇は、又た海事の天皇たるなり。即ち水に關係し、之を水曜日に配す。

此天皇證して「應神」天皇と申す。これ北歐古代の人民、特にスカンヂナビヤ人の尊信せし軍神オーヂン (Odin) なる可し。何となれば應神と「オーヂン」とは發音相同じく、又た前記神功皇后と同一なるべきフリア神とオーヂンの神との連絡ありとして、西洋歷史の傳ふる所あるとは、又た余の立說を援助するなり。

八幡船とオーヂン船

此天皇「水曜日」に於て紀念せらる

單に是に止まらず、尙ほ一層有力なる比較は、應神天皇は日本に於ては八幡神として武の神として傳はり、又た八幡船なるものは八幡神の名を以つて、「應神」天皇を信じ、冒險大膽なる海賊として、支那、朝鮮の沿岸を荒掠せしは日本史家の熟知せる所なり。之と同じく西洋に在つては所謂スカンヂナビア人或は北人なるものは軍神オーヂン及びトールの神を信奉して、地中海より北海岸一面に活動せり。其東洋に向へる者は八幡神たる「應神」天皇たり、其西洋に向へる者はオーヂンの神を信奉し、其働く所は海賊—或は通商植民たりしや東西同一たるなり。是に於てか、吾人は確信し、且つ斷言す—吾應神天皇の御名は、スカンヂナビヤ人等の信奉せし所のオーヂンの神と同一にして、吾應神天皇の御名は、極東より極西、極北の地にまでも喧傳せられ給へりと。

此天皇の御名の七曜中に表はるゝものは、水曜日たる英語 Wednesday 即ち Odin (オーヂン)(應神) 或は Woden (ウーチン) の日なり。

(三)日曜、月曜、火曜、土曜

日曜
月曜
火曜
土曜日は須佐之男の日

二　日曜、月曜、火曜、土曜

以上日本の三大天皇の世界歴史に於ける位置や此くの如く夫れ偉大にして光榮あるものなり。尚ほ七曜中右三曜以外の四曜も、亦吾神史に起原せるものにして、—

日曜日—は『日』神天照大御神を紀念し、

月曜日—は『月』神月讀ノ神即ちヘルメースを紀念し、

火曜日は、Tuesday (Tiwes, Tiu) にして、雷霆の神『火』の神ゼウス(伊邪那岐ノ神)或は大物主ノ神を紀念し、

水、木、金—は前述應神、仲哀、神功を紀念し、

土曜日は—英語 サターデー Saturday にして海神 Saturn の日なり。此神は海神たると同時に種樹の神『土』の神にして、吾須佐之男命に當れるなり。須佐之男命の海神たると同時に又た種樹の神なることは日本紀の記るせる所、又た其追はれて新羅伊太利方面へ行き給ひしとの事も、日本紀及び西洋の傳說共に同

一にして、此 Saturday は明に須佐之男命の日たるなり。此くて彼我所傳の天皇及び諸神の七曜對照表を作らば左の如し。

日曜日—天照大神の日 (Atheuu)……Sunday
月曜日—月讀の神の日 (Hermes)……Monday
火曜日—大物主ノ神の日 (Zeus)……Tuesday
水曜日—應神天皇の日 (Odin)……Wednesday
木曜日—仲哀天皇の日 (Thor)……Thursday
金曜日—神功皇后の日 (Jingo=Fuuiu)……Friday
土曜日—須佐之男の日 (Saturn)……Saturday

の如き明瞭なる結果を得て、全世界の人民は吾國祖先の神々及び天皇を紀念せるなり。特にスカンヂナビア人が豐浦、神功、應神等の神々を尊信せるに見る時は、日本との人種關係や決して之れ無きに非ず。

且つ北人或はスカンヂナビア人等の神話は、吾が希臘日本神話の變形にして、余の知れる範圍を以つてするときは、現時の獨逸の諸地名は、日本民族

の命名せるもの甚だ多きを知るなり。（獨逸諸國名及び諸地名は日本俗曲「十日戎」中に讀み込みあり。考證は此に略す）。比較神話學者、言語學者、歴史家等、從來の如く愚鈍を以つて甘んずべきに非ず、鋭意大研究を行ふべきなり。

第十三章　餘論及び結論——國學は世界統一學

一　約說

（一）約說

神話、言語

歴史、地理

日本古代版圖

第一卷より第二卷に亘りて、余は日本人の希臘羅典系の人種たるを論じ、之を證明せんが爲めに、東西の神話及び言語を比較して其同一系統なるを發見し、又た歴史地理の研究に由りて余の着想の磐石的基礎を置きたり。

日本人の歴史は小亞細亞を天なりとして其出發地點と爲し、希臘に移り、後埃及を以つて『中國』と爲し、東西洋の樞要に居りて以つて神政を行ひ『世界一家的大帝國』を形成し、東は波斯、亞拉比亞、印度を包有し、東境の海岸はメーコン河口に至り、其内陸は西藏全部を包容して、之を版圖の東北端と爲し、凡て是等亞細亞諸國を『東國』と稱し、西は歐羅巴に交通し、之を『夜の食國』と爲し、

世界統一主義

地中海岸特に阿弗利加北岸を『海原』と稱し、希臘は『筑紫』たり、伊太利は『西蕃』たり、實に祝詞の——

『辭別きて伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく、皇大御神の見霽かします四方の國は、天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、青雲の靄く極み、白雲の墜り居向ふ伏す限り、青海原は掉拓干さず、舟の艫の至り留まる極み、大海に舟滿ち積けて、陸より往く者は荷の緒結ひ堅めて、磐根木の根履みさくみて、馬の爪の至り留まる限り長道間なく立ち續けて、狹き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打懸けて引き寄することの如く、皇大御神の寄さし奉り給へば云々』

との言の如くにして、是れ決して文飾に非ず、歴史的眞正の事實たりしなり。然り是れ太古の神國日本なり。余の日本太古史は世界的研究に據りて祝詞の言に歴史的事實的學術的の證明を與ふる者なり。何者の無識漢ぞ敢て吾人の研究上の結果を云々し、以つて大日本の大歴史を小日本の小歴史化せんとするぞ。

(二)尚省略せる事項

難波

南北倭

筑紫

任那

魏史倭人傳地理

二　尚ほ省略せる事項

此他尚ほ余の研究せし事項にして、今回の發表に及ばざる所は——

○仁德天皇の難波は決して極東日本の大坂に非ずして、埃及スエズ及び北希臘アカルナニア地理の混合なること。

○大和に南北倭ありて(釋日本紀の言へるが如く)、北倭は埃及たり、南倭はエチオピア(アビシニア)なること。

○筑紫の第一のものは希臘たり、第二筑紫はナイル河西口にあり、第三筑紫はエチオピア海岸の稱り。第四筑紫は印度南端なること。

○任那はマケドニア及びカーシデケー半島の地なること。

○魏史倭人傳卑彌呼記事の地理は、アルプス地方より伊太利北岸を傳ひ、北希臘對馬より、南希臘マッラ(エピラ)を經、其地を横斷して東岸ヘルミオネ(希臘國より、クレタ島に渡り、埃及(耶馬臺)に至るの地理たり、狗奴國とはナイル上流クヌ國たり、其他倭人領土とせる所は埃及亞拉比亞其

他の地なること。

○阿倍比羅夫の征討したる肅愼とは黑海沿岸の地にして「肅愼を「ミシハセ」或は「アシハセ」と謂ふは Mysi-phainoia, Arsi-phainoia にして、Mysia 人或は Asania 人の事なり。肅愼とは Euxin の訛れるものなること。

○天智天皇紀中の三韓及び唐は、小亞細亞にして、新羅とは小亞細亞西北部の Bithynia なり、高麗とは其南隣の Mysia なり、百濟とは又其南隣 Lydia なり、唐(カラ)とは又其南隣 Caria なり。

故に天智天皇の元年「高麗援を國家に乞ふ(日本)仍ち軍將を遣はし、疎留城(Sardis)に據る、是に由りて唐(Caria)人、其南堺を略することを得ず。新羅其西壘を輸(堅す)ことを得ず」の記事を說明するを得べし。又た日本海軍が、唐の海軍の爲めに全敗したる所の白村江地理はスミルナ(Smyrna)灣口の Lencae(白村)なること。

○野馬臺の詩及び謠曲高野物狂は或は埃及日本の悲史にあらずやと思はるゝこと。

天智天皇時代の三韓

野馬臺の詩

支那大古史

○支那太古史亦吾人の新研究を之に加へ、其三皇五帝時代は小亞細亞、波斯、埃及、阿弗利加の地名たり、夏殷時代はバビロニアたり。周の或時代までは尙ほ其地方に國せしこと。其後尙ほ諸時代に西洋時代の歷史的材料を混入せること。

朝鮮太古史

○朝鮮亦た伊太利及び小亞細亞神話及び傳說を極東に持ち傳へ居ること。

と。其太古史は極東史に非ずして西洋地理なること。

等は余の研究し置きし所なりと雖、今回の發表には之を略し、他日を期して發表せんと欲す。若し夫れ天智天皇時代の歷史は尙ほ極東に非ずして、亞拉比亞海及び地中海方面なりしとせば、日本書紀時代の日本帝國の所在又た推知すべきにあらずや。

(三)萬葉集及び謠曲地理

三　萬葉集及び謠曲地理

其他文學に關する方面に出でたる地理の研究は、甚だ愉快なるものにして、日本太古の埃及中心世界的時代あるを明示するの十二分の材料を供給

萬葉集

越中の守家持

立山

布勢湖

するなり。

萬葉集若し大伴の家持の編輯に成れりとせんか、彼れの越中の守たりし時の越中立山（タチ山にして立山に非ず）の歌に（萬葉十七ノ下）

『其のたち山に常夏に雪ふりしきて……』

の句あり、又た大伴の池主の歌に

『高きたち山冬夏と、わくこともなく白妙に雪は降り置きて……』

とある如き立山は、現日本の越中なる北緯三十六度七八分の九千尺餘の低き山には有るまじき歌なり。意ふに是れ越中とはエチオピアのエチオの訛りしものなる如し。家持又た布勢の海を詠ずること多し。現日本の越中に果して萬葉的布勢の大湖水之れありや如何ん。有ること無し。是れアビシニアの Paobo（プボ）湖の「プセ」の「フセ（布勢）」となりしものゝ如し（現名 Hanna 湖）。

萬葉集『東歌』は極東日本の東歌に非ずして、波斯灣口より海陸東してカムボヂアなるメーコン河に至る間の東國（埃及より言ふの謂ひなる如し）

近江の八十島

謠曲

若し夫れ然りとせば萬葉地理は又々吾人の新研究の範圍に入れるものと謂ふ可し。然り『近江の海泊八十あり、八十島の云々』の歌の如き、決して現近江の海に非ざるなり。何となれば、琵琶湖には泊八十なく、八十島の如きもの有らざればなり。然り是れ紅海即ち亞拉比亞海なればなり。

謠曲—には新作舊作相混じ、其舊作と雖大に後代の改作を加へ、新地理（即ち現日本地理）の分子を混入せるものありと雖、舊作中には甚だ多く西方—埃及中心—日本地理を裏切りせるなり。今其注意すべきもの數種の地理を言はゞ、（曲題いろは順）

一角仙人—波羅那山の記事あり、天笠なりと記しあり。是れシナイ半島パラン（Paran）山なり。

千引—西藏、古代のイセドン・セリカ（Issedon-Serica）の地なり。

合浦—江海の入口バベルマンデブ（Bab-el-Mandeb）なるが如し。

邯鄲—佛蘭西中部カンタル（Cantal）の地なるが如し。

高野物狂—にはピラミッド帝國（平松殿滅亡記事、印度、インドス河上流タキ

シラ(Thasila)に高師四郎)及び遥羅國名(春滿殿)を秘藏せり。

春日龍神—は西藏のマナサルワール湖附近記事なり。

大瓶猩々—佛蘭西カンタルの地を謂へり。

當麻—印度ヒマラヤ山南の地なるが如し。

道成寺—は遥羅のメナム河なり。

玉の井—は埃及東北部ナイル河の東口地なり。

歌占—はエチオピア或はアビシニアなり。

浦島—は埃及メンザレー—是れ水の江なり。

老松—は埃及ギゼーのピラミット記事を秘藏せるものなり。

大江山—はアビシニアのダシャン(立山)にして、酒呑童子とはスーダン童子なり。

花月—はアビシニアよりも南方の地なるが如し。

國栖—はエチオピアなり。此謠曲中「唐までも遠く續ける吉野山」の言あるに注意すべし。如何に文學書なればとて、如何に古人は地理に暗しとて、

吾現日本の吉野山が、唐までも續けりなどゝ想ふことは無き筈なり。然り是れ現日本の地理を謂へるものに非ずして、アビシニアなればなり。天武天皇の淨見原の宮は此地の吉野川の下流にありとの記事あり、又た研究材料なりとす。

枕慈童—はアルプス山地、蓋瑞西オ、ストリアの間なるが如し。

卷絹—メーコン河地理に關す。

舞車—マレー半島と印度との間なるが如し。

船橋—インドス河上流を經過し今のツルキスタン方面に至るものゝ如し。

粉川寺—には天智天皇に關する秘密歴史を存せる如し。

天鼓—は獨逸ライン河畔アーヘン府に關す。

綾鼓—はアビシニア海岸地。

海士—亞拉比亞海の入口バベルマンデブ(Bab el-Mandeb)海峽地なるが如し。

阿漕—アビシニア海岸なり。阿漕の漁夫譚はアラビヤ夜話の漁夫物語と同一なり。

櫻川—アデン、オーマン、及び印度間なるが如し。

和布刈—は埃及ナイル河西口の地なるが如し。猶太教は此材料に由りて「出埃及記」紅海渡渉記を作る(第一卷に載せあり)。

白髭—亞拉比亞海、スエス附近の記事なり、又たマダガスカル島の記事を含める如し。

猩々—アビシニアなるが如し。

石橋—同じ。

此くて謠曲研究は非常に趣味あるものにして、其地理は西北は歐羅巴にては佛蘭西、獨逸に及び、東方亞細亞に於ては西藏及び遐羅の地に及び、南は阿弗利加大海中なるマダガスカルにまでも及び、實に世界的大地理に關せるものにして、謠曲の研究は、又た吾人の新研究の範圍に入らざる可からざるなり。

謠曲は世界的

萬葉及び謠曲の地理此くの如しとせば、之に附隨する所の人種問題、歴史、神話問題等も又た從つて廣大なる研究範圍を有し來り、到底從來の如き小眼界の士の能くし得る所に非るなり。余は實に意へらく、謠曲は大和民族の世界的大國觀念、及び人情教育の大經典にして、萬葉集等の及ぶ所に非ざるなりと。然るに從來の國文國史家此事には夢想だに及ばず、僅かに謠曲二百番、壹多寶生、觀世等の文章の異同を對照して得々たる如きは、是れ研究の階段とも謂ふに足らず—書肆小僧の爲す所たるのみ。

從來學者の誤謬

萬葉及び謠曲以外過去の大日本研究の材料は無數にして、戲曲に、俗謠に、風土記に、小說に、傳說に、口碑に枚擧に遑あらざるなり。然るに從來の學者無學にして之を知らず、自己の知識の及ばざる所は、盡く之を僞作なり、異端なり、傳說なり、奇怪傳なり、虛構談なりとして之を棄て去れり。焉んぞ知らん、其等は過去の大日本の史料たらんとは。

近松

近松の戲曲—の如きすら、意外不思議の『大日本』の史料を載せて今日に傳ふるなり。然るに近松學者等何等の感をだに有せざるなり。嗚呼實に『大

日本』史、日本國學、國文の危機は今日なりき。余の新研究法出づるに非ずんば、日本は可惜大材料を土芥的に葬り去らざる可かりしなり。危かりしかな。

四　現日本國土の日本歴史は何れの時より始まるか

（四）現日本國土の日本歴史は何れの時より始まるか

太古日本

必至の疑問

余の今回發表したる所は日本太古史の一部にして、尚ほ日本帝國の埃及を中心と爲せる時代の事にして、帝國の中心と、其東西兩境界、即ち日本國民の過去の舞臺は如何に大なりしかを示めすに止まれり。故に是等は現日本島國の日本歴史に非ずして、過去の一部たるに過ぎざるなり。

茲に於て必至の問題として『現島國日本の歴史は何れの時より始まるか』との言は提出せらるゝなり。余は之に答ふるには『未だ其の研究に及ぶ能はず』との言を以つてするあるのみ。何となれば新研究の日尚ほ淺く、年代の上より下に研究し下りつゝある余は、未だ其の問題に答へ得るの地點に

解答は未だし

達せず、其地點に達せんには、

第一、時日を要し、

第二、多大の研究費及び探險費を要し、

第三、研究材料の蒐集を要し、

第四、十分なる言論の自由を要す、

ることを告白す。而して余の現在の境遇は盡く此條件を缺損せるものなり。若し此四條件だに、多少なりとも天若し余に與ふるならんには、余は國史上尚一層の新貢献を爲し得るを確信す。既に今回の發表と雖、余は余の盡くし得る限を盡くし、盡くし得ざる程度を超えても盡くし、余の家政及び余の健康を犠牲に供せし多大のものあり、之れに加ふるに當然余に對して無上の敬禮を拂ふべき或社會よりは、却つて無上の冷笑を受け、余の一身一家は益々難境に陷り、到底此以上を日本國家に犠牲に供し得ざる點に達せり。只だ余は世間の文士の頗に倣ひて、女々しき言を發せざるのみ。

余一身の事情上の困難

余の事情此くの如し。故に『現島國日本の歴史は何れの時より始まるか』

の問題を以つて今暫く余を追窮すること勿らんことを希望す。

事實は否定すべからず

然りと雖其研究し得たる範圍に於て——既知の範圍に於て——吾太古史は現島國日本に非ざるを明知せし以上は、此事實は如何にすとも否定す可からず。又吾太古史は希臘、モロッコ、埃及、亞拉比亞、印度、暹羅の地の日本民族歷史たり、又た吾人は現に極東太平洋上の島國に國せる以上は、何れの時にか此國土に移渡せしものならざる可からず。

余の想像

若し余の研究範圍外に想像を試むることを許すとせば、奈良朝或は平安朝時代にして、此時代は繪畫を以つてすれば「ぼかし」的時代たり、東西日本歷史の混交參差せる時代たり、其文學書の如きは殊に然るものにして、下つて源平時代に至ると雖、尙ほ數多亞拉比亞及び印度方面の歷史及び傳說の混入せるを見る。

されば奈良朝以前の日本歷史は、未だ極東現日本の日本歷史に非ずと謂ふも、餘りに大に誤り無かるべきを信ず。

國家史と人民史

然りと雖國家の歷史と人民の歷史とは、必ずしも同一に非ず。國家の歷

史料の政策的破壞

史あるの前にも、人民は尙ほ其存在と其歷史とは之を有し得るものにして、極東島國は、早くより西洋方面よりの植民移住ありしは、歷史前の歷史として存することを得るものなり。

吾人は、現存せる歷史及び史料以外、尙ほ有力、有益、偉大なるものを有し居たるも、過去の極東移住時代の政策として、政府は其等の材料を破壞廢棄したるもの夥しきを信ずる者なり。神皇正統記應神天皇記中に『異朝の一書の中に、日本は吳の太伯の後なりと言ふといへり。かへすがへすも當らぬ事なり。昔日本は三韓と同種なりと言ふ事のありじかの事を桓武の御代に燒き棄てられしなり』と言ひ、又た平城天皇の大同四年に勅したまはく『民間に傳ふる所の倭漢總歷帝譜圖は、天之御中主尊を以つて首祖と爲し、而して魯王、吳王、高麗王、漢高祖等の如きをも其後に接觸す。漢倭雜糅して敢て天朝を汚すを愚民悟らずして實錄たりと謂へり。諸有司の有する所は宜しく悉く官に進むべし。若し令に違ふ者あらば之を重科に置かん』と。其廢棄破壞せし史料は此種の天朝を汚すものゝみに止まらず。併せて善良な

所謂正史

るものをも滅ぼせしものあるは之を思はざるを得ざるなり。

此くて從來信じ來れる所の正史必ずも正史に非ずして、一時の政策的歴史、構造的のものあるべく、嚴正なる學術的新研究を以つて、高等批評を試み、然る後に非るよりは容易に過去の所謂正史なるものを信ず可からざるなり。

所謂俗說

之と同じく、從來の小說視し、俗說視し、僞作視せし書物の今日に傳はれるものにして、甚だ眞史なるもの多くある可きは余は信ぜざらんとするも得べからざるなり。倭姫世紀の如き、風土記の如き特に然り。耶馬臺の詩の如きは、世人以つて後人の僞作なりと爲せりと雖、新研究の眼を以つてする時は最も有力なる一史料たるが如し。

問題解答法

されば所謂正史以外の史料を集め、嚴密なる高等批評を加へて研究するに於ては、西方日本歴史と、東方日本歴史との接合點を發見するは、決して不可能の事に非ず、其要件の大なるものは、現日本の地理に於て史料に表はるゝ所の地名を發見し得べく、其地名は其他の地名、位置、方角距離等と合理的

地理研究

調和を保ち、又た全體の事變の性質と矛盾せざるを得ることにして、又た若し建築物、或は遺物或は遺跡ある時は、善く其等の眞贋或は本物、轉移摸擬等を明かにし、以つて研究に臨まざる可からざるなり。

此くして是等の要件を備へ、現日本地理の實際に於て、地理的、事變的系統の調和を得る時は、こゝに始めて日本歴史は現日本の歴史となるものなり。故に嚴密なる歴史地理の研究は諸研究中の最も重要なるものにして、希臘羅典語の知識は、又決して無かる可からざるものと爲す。

されば、何れの時より現日本島國の日本歴史は始まるかとの質問に對しては、目下余は之を答へ得ずと雖、前記四個の條件を得だにせば、余は答へ得べきを斷言するなり。

五　從來の研究の不完全——文獻學の缺損

從來の國史研究は極めて幼稚なるものにして、高等批評を缺損し、只だ諸

歴史家の幼稚

(五)從來の研究法の不完全——文獻學の缺損

文獻學を缺ける人類學

先づ文獻學を

彼等の順序轉倒

材料及び所謂正史なるものを盲信し、何等眞正なる研究を行ふことなく、疑はしきを疑はしとせず、一意牽强附會を是れ事とせり。されば日本に徵すべき文獻に富めるに係はらず、眞の文獻學なるもの無く、日本國典は果して如何なる地理に就て記せるものなるかの如きは、全然之を不問に附し、一躍直ちに人種及び言語關係研究なりと稱して、近代の南洋或は滿洲朝鮮等をあさり、寒貧にして而も甚だ信ずべからざる少材料を集めて早くも速斷を下さんとせり。帝國大學の如き即ち是れなり。

彼等は、國典が、日本太古の人種に就て、地理に就て、言語に就て、豐かに明瞭に吾人に語れるを知らず、又た之を問はず。古墳をあばき、瓦片の一二を拾ひ、石器の二三を發掘し得て、以つて人種關係の知識を得るの唯一の材料なりと思へる如し。愚なりと謂ふ可し。

彼等は研究法の前後順序を轉倒せるなり。宜しく先つ明瞭に言語せる文獻を研究し、其尙ほ足らざる所を補ひ、或は傍證を得んが爲めに其等の事を爲すべきのみ。是を之れ爲さずして『近時代』の探險を行ひ以つて太古を

古文、古語を要す

知らんとす——寧ろ愚に近き方法と謂ふ可きのみ。

古代を知らんには古文古語古史を知るを要す。然るに彼等之を知らず。朝鮮、滿洲等の近代語の二三を拾ひ得て比較す。笑ふべきのみ。優等人種の研究には優等人種を比較すべし。然るに彼等は優等なる日本人種に比較するに、未開の南洋土人、或はアイヌ人等を以つてせんとす。誤れりと謂ふ可し。要するに是れ皆文獻學の缺損に基づくものなり。

大研究には大比較を要す。然るに彼等大比較を行ふの大知識なく、大見識なく、又た着眼及び目標を誤れり。其正當の結果を得ざるや當然なり。

故に余は謂ふ、文獻學の研究を缺損して人種學人類學等を研究するは、勞多くして功少く、其方法としては最も愚昧なるものなりと。然るに悲いかな日本には未だ眞正の文獻學あらずして、僅に余の新研究に據りて、日本の學術的眞正なる文獻學は始まるものなりと。

吾人の創めたる大比較の日本文獻學を以てするも、優に人類人種の分布、植民、移轉の方向及び地理は大抵之を明にするを得たるものにして、日本人

種の諸關係は、小亞細亞に起り、西は全歐洲及び阿弗利加方面に分布し、東は波斯、亞拉比亞、印度諸人種と關係を有し、東方海岸は馬來を通過し、陸上にては西藏に至れるとは、日本文獻の明記せる所。既に此地點にまで日本人種の東漸西移を明にしたる以上は、極東島國なる現日本人種と西隣諸人種との關係は低能學團の人々と雖能く之を知るを得んのみ。故に余は言ふ。先づ文獻學を修むべし、先づ文獻學を修むべしと。

(六)新研究の及ぼす可き影響

舊字書註解書類の廢棄

日本歴史の根本的改訂

六　新研究の及ぼす可き影響

字書類註解書類の廢棄——本書に於て吾人の論述せし所は言語なり、神話なり、宗教なり、歴史なり、地理なり、人種なり——是等の問題に就ては、全然從來の日本學者と見を異にし、言語に於ては、語原學上の大變動を來し、從來の國語國文の解釋上、多大の變改を要し、又た從來の日本字書類は大部分廢滅に歸せざる可からざる運命を宣告するなり。

日本歴史の根本的改訂——歴史地理の新發見は日本歴史の新編纂を必至

世界歴史の大改訂

人類感及び宗教觀の革命

日本外交の正々堂々

ならしめ、從來の史書の大部分に廢版を命令するなり。

世界歴史の大改訂——是等は單に日本語及び日本歴史に止まらず、世界の言語學に至大の影響を及ぼし、又た世界太古史全部の改變を餘儀なくせしむ。

人類感及び宗教觀革命——然りと雖吾人の新發見は言語の點より寧ろ人類一原觀に力を添え、世界の宗教亦一原にして、皆我神道種々の變形たり、傲慢不遜の猶太教、耶蘇教等は我神道の慳縮に成れるを教へ、以つて西洋人等の傲慢心に打擊を加へ、神道を以つて世界の大宗教を統一するを得、以つて世界人類の和合を促がす。

日本外交の正々堂々——茲に於て吾等希臘羅典的系統の人種たり、世界最古(グライキ)(Graeci)の民族たり、世界文明の卒先者たる瑞穂(ミツホ)人種(Mizuhoism)の資格を以て全世界に臨む。西洋諸國の偏見利己、而も誤謬なる人種感の基礎を轉覆し、其位置を轉倒するを得べく、「怯懦」の別名たる外交官等も大に其意を强ふし、肩幅を廣くして、世界の大道を濶歩して可なり。彼等は余の新研究に負

世界歴史の改訂大綱

る所少なからざるべく、新研究の結果たる本書は又た以つて外交の經典と爲すべし。英國の如きと雖、是れ只だ吾が古代の一個の本卒知部の國民たりしに過ぎざるなり。其國の紋章ジョルジ十字旗之を證明す。

世界歴史の改訂大綱——今若し余の新研究の結果に基づきて新に世界歴史を編纂せんと欲せば大要左の如きならんか。

第一、日本高天原神政時代（神話時代）——小亞細亞（天）、前の希臘（筑紫）、歐羅巴（夜）の食國（地中海岸（海原））

第二、アッシリア、バビロン時代（天照大御神の御弟の國）

第三、埃及及びポイニシア時代（日本の國造の國）

第四、支那植民時代——シナイ半島及び猶太より人種東方移動

第五、印度植民時代——埃及、阿弗利加よりの植民

第六、猶太時代（埃及、日本の奴隷の國）

第七、後の希臘時代（日本人種の後裔）

第八、羅馬時代（稻氷命の創建）

日本民族の抱負

第九、後の歐羅巴時代——中古及び近世

第十、後の日本時代——極東日本——現代

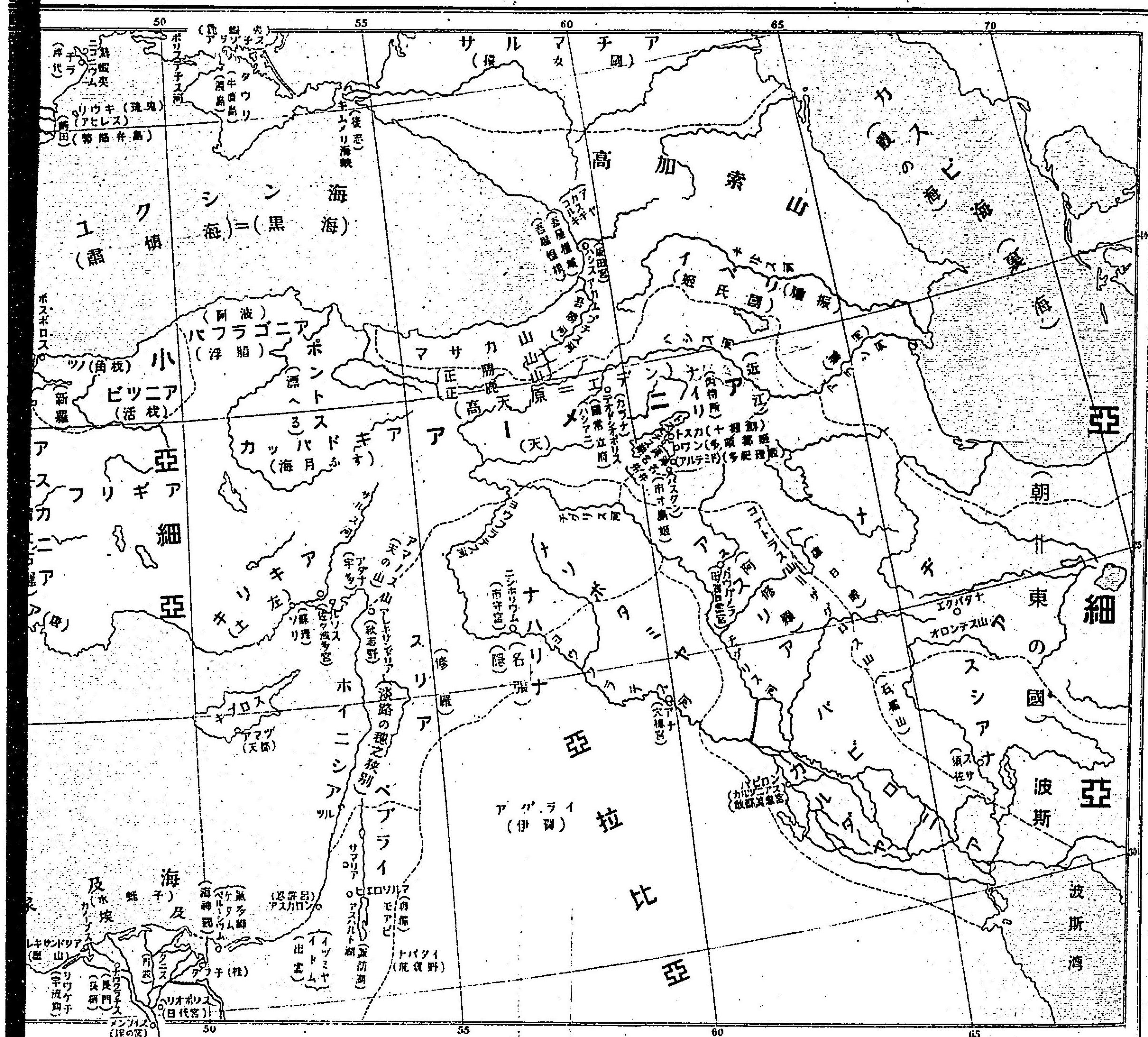
第十一、全世界交通時代——現代

日本民族の抱負——若し又た將來の希望と抱負とを述ぶるを得ば、余は日本國民の吾人の新研究より生すべき當然の自覺として、日本民族は世界最古の文明人たるべく、日本の皇室は世界最古の中心的神系たり、天の御中主神を始祖と爲し、世界統一の神たる天照大御神を皇祖と爲し、萬世一系を以つて文明平和の神たるミューズの神々を宮中八神として祭り給へる天子たり、祭司たるに見て——

第十二、世界の神政を復古し、日本帝國は世界統一、德光的帝國の中心たり、日本皇帝陛下は當然世界唯一の天皇たり、天子たり、餘他の諸國は當然太古の日本の國造の家たるべきなり。

との事を以つてせん。然り、古來祭司は人間階級の最高至上のものにして、世間の帝王以上たるは埃及及び印度史之を示めせり。

地圖



國學は世界統一學

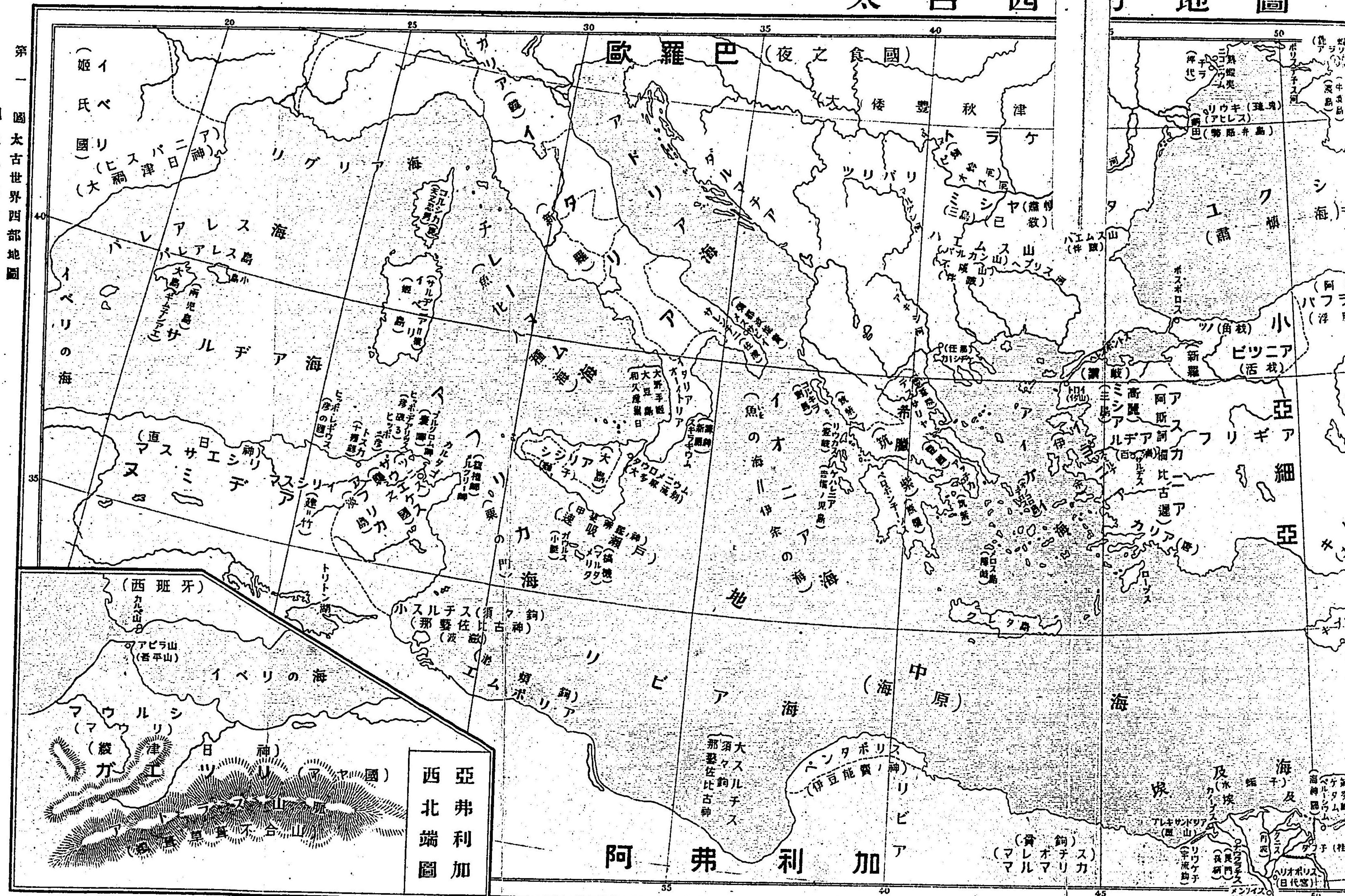
國學は世界統一學──日本の新研究及び其齎らす所此くの如し。從來の國學者たる者は、僅に古事記傳を研究し、枕の草紙、源氏物語及び古今集等を讀まば事足りき。然るに一旦新研究は開始せられ、新日本學の創始せらるるに及びては、今日以後の國學者たるものは、決して從來の如き淺學寡聞を以つて甘んずべきに非ず。「日本學」なるものは語學、神話、宗教、經世、歷史、地理、人種等、其の他一切の知識を有し、而も博學多識、一世に冠たる人に非ざれば能くすべからざる所にして、國學即ち日本學は一切學問の冠冕たり、國學者は一切學者の項上に位し、國學は實に治國平天下最要の學科たるべく、國學は夫れ遂に世界統一學と謂ふ可きなり。

世界的研究に基づける **日本太古史** 下卷 終

太古西方地圖

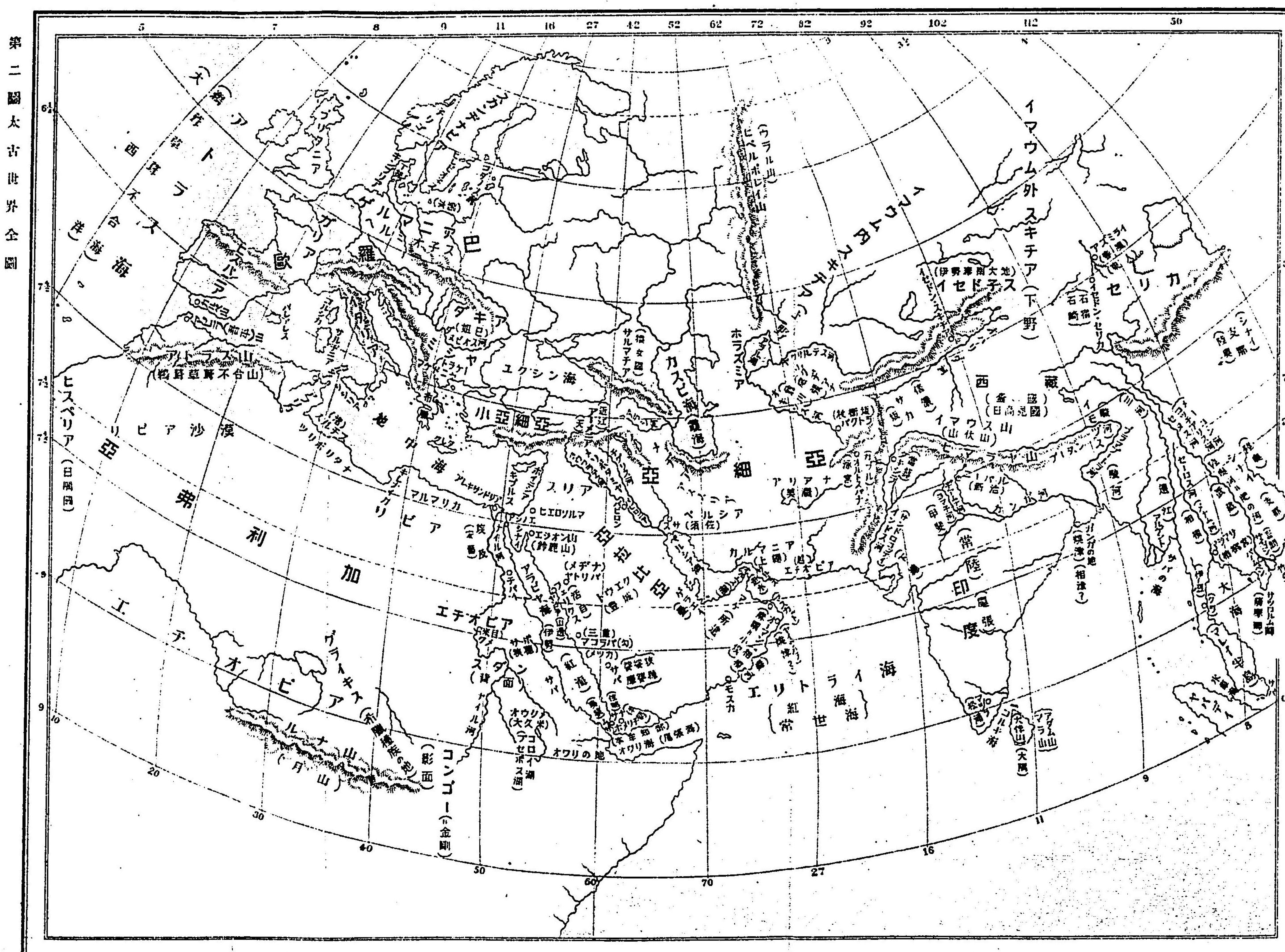
第一圖 太古世界西部地圖

國生み地圖

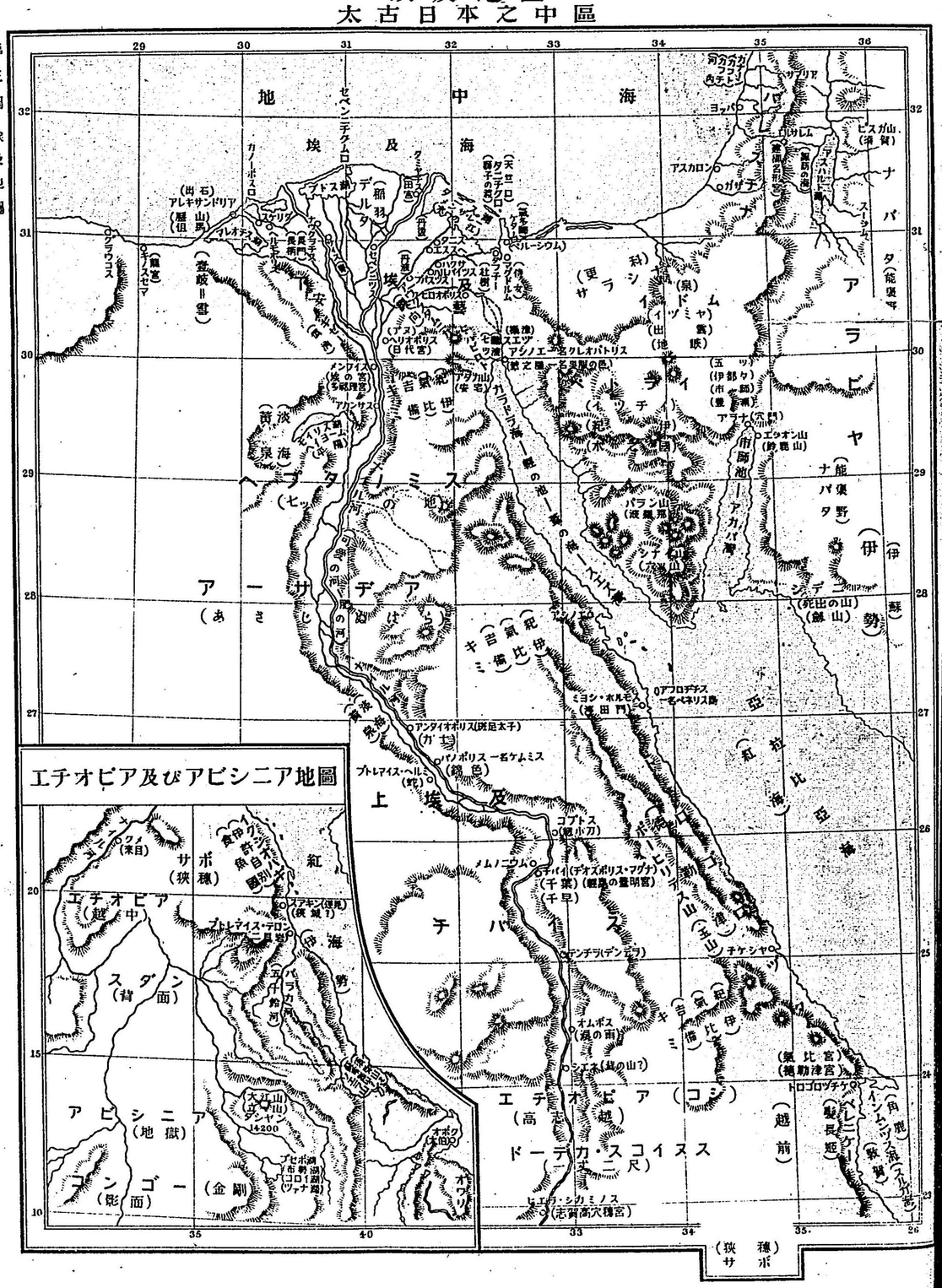


第二圖　太古世界全圖
太古日本全圖

太古世界全圖

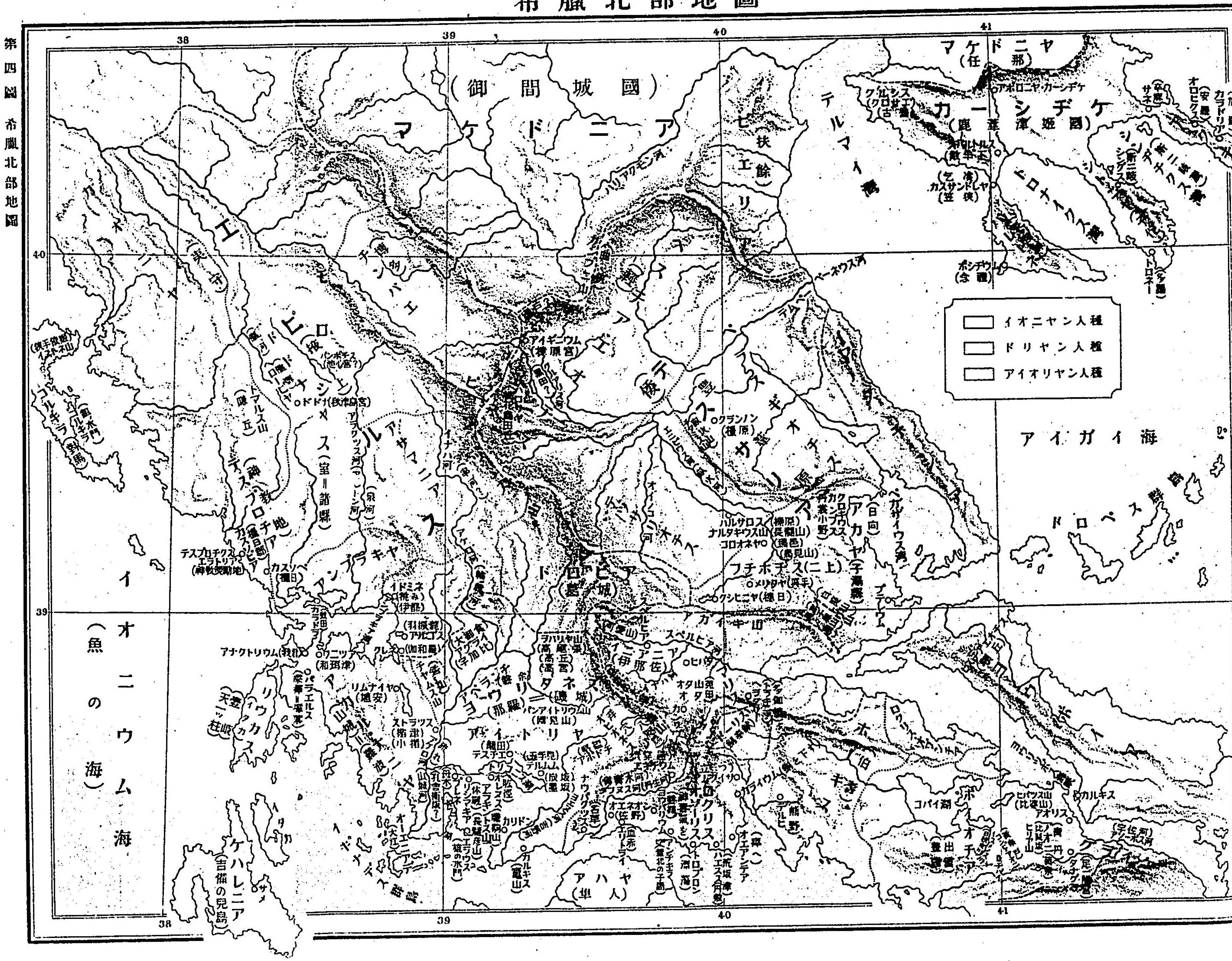


埃及地圖
太古日本之中區



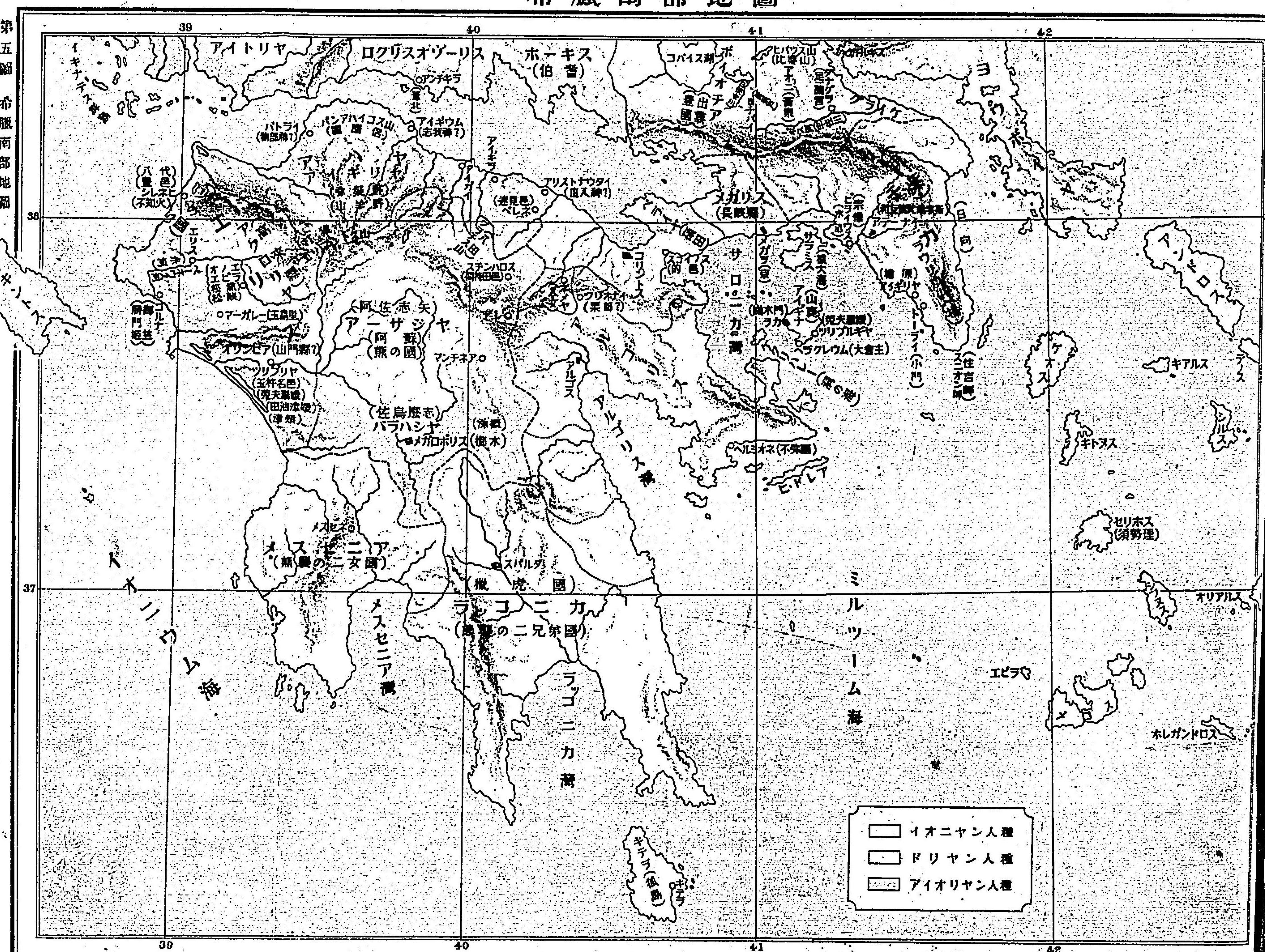
第四圖　希臘北部地圖
筑紫及び神武天皇倭

希臘北部地圖

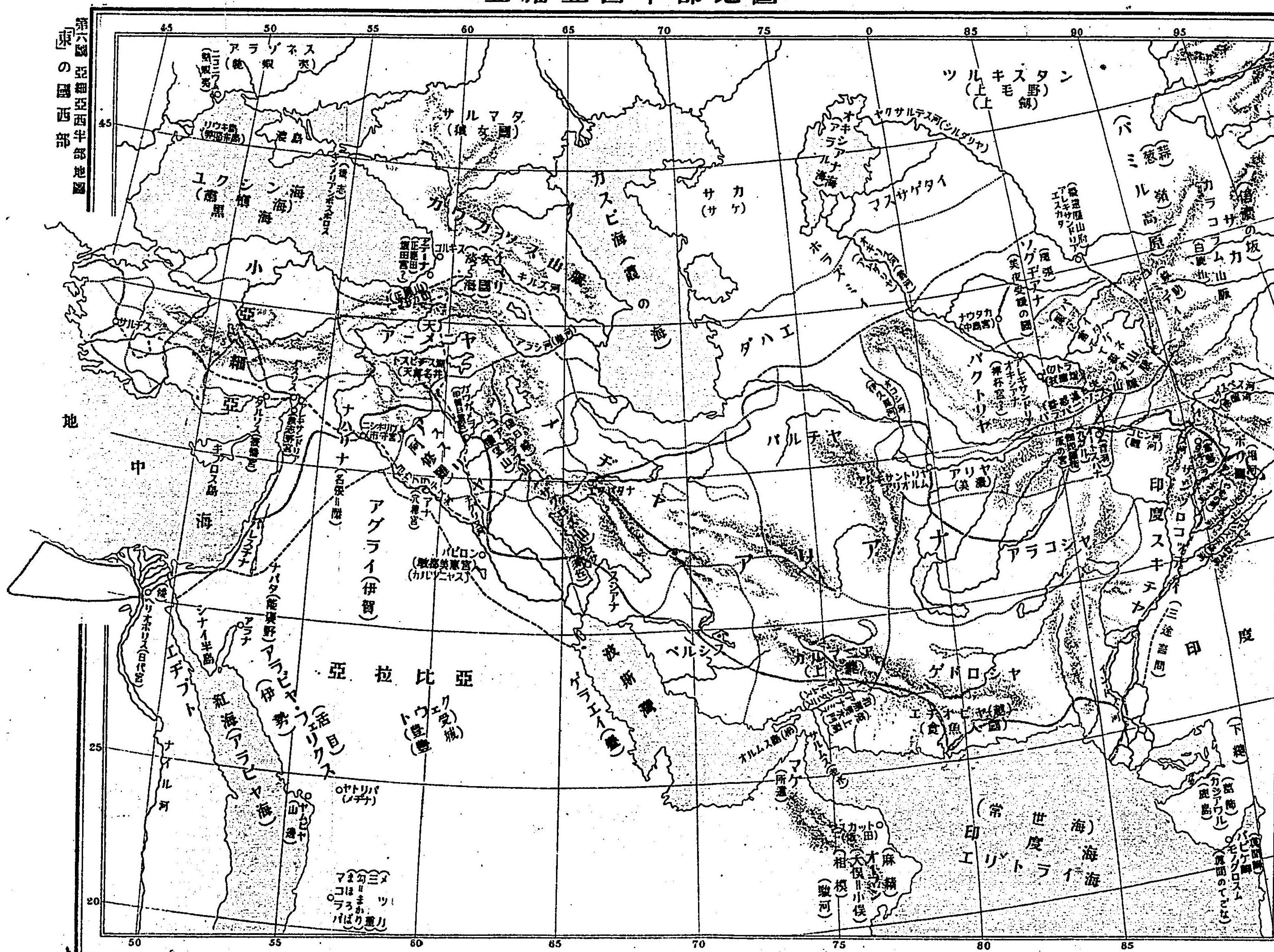


希臘南部地圖

第五圖 希臘南部地圖 筑紫及び熊襲



亞細亞西半部地圖



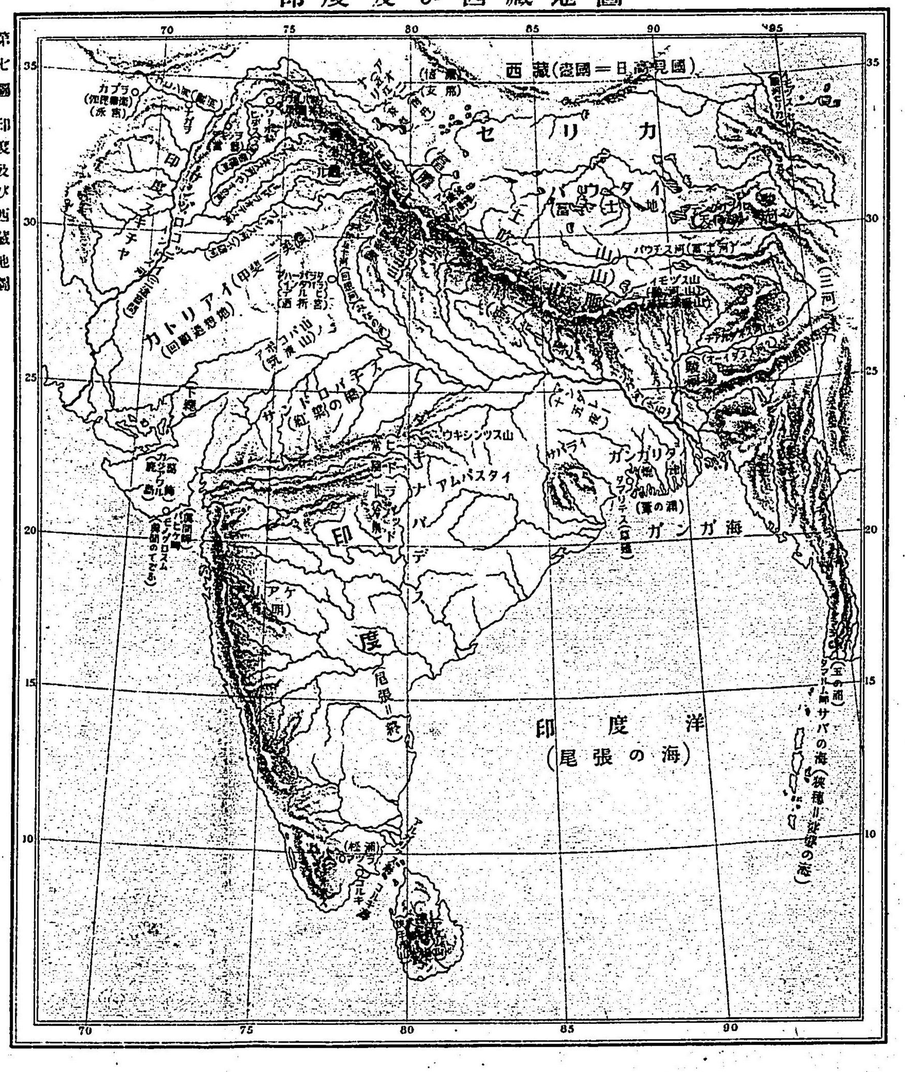
——— キルス及びキセノフォン路

——— アレキサンドル往復路

第七圖　印度及び西藏地圖

「東」の國中部

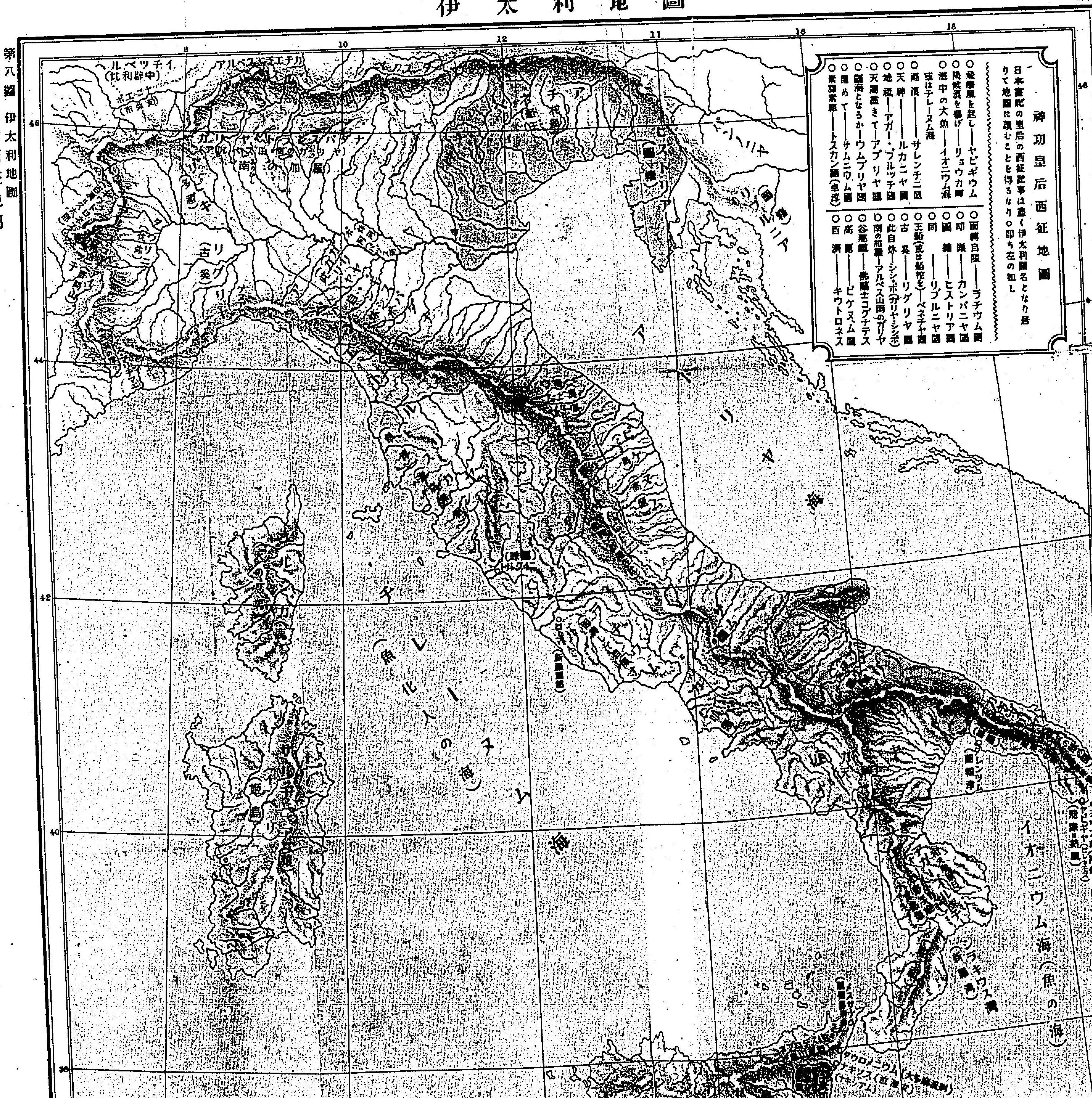
印度及び西藏地圖



皇后西征地圖
西征記事は專ら伊太利國名となり居ることを得るなり○即ち左の如し
○ビギウム（ヒョウカ岬）
○叩頭——カンパニヤ國
○國籍——ヒストリア國
○同——リブルニヤ國
○面縛自殺——ラチウム國
○王船（或は船枕を）——ベネチヤ國
○古墓——リグリヤ國
○此自殺——シシリヤ（カリヤ・シシボ）
○南の加羅——アルペス山南のプリヤ國
○谷羅蔵——佛蘭土コンプナテス
○高麗——ピケヌム國
○百濟——キウトロネス
アドリヤ海
ティレニヤ海
イオニウム海（魚の海）
ビギウム
ラチウム
カンパニヤ
ヒストリア
リブルニヤ
ベネチヤ
リグリヤ
シラキウ入港（新羅港）
ケクロメニウム（ケキリズ）
ナキリズ（紀伊）
ケキシアム
タタナ（カニ港市）
ヒケヌム
キウトロネス
8
10
12
14
16
18
40
42
44

伊太利地圖

第八圖　伊太利地圖
神功皇后西征地圖



明治四十五年四月十三日印刷
明治四十五年四月十七日發行

（世界的研究に基づける日本大古史下卷）

不許複製
定價金貳圓七拾錢

著作兼發行者　東京市牛込區榎町大字榎木三〇九番地　木村鷹太郎

印刷者　東京市牛込區榎町七番地　渡邊八太郎

印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社

發賣元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館
（振替貯金口座東京二四〇番）

木村鷹太郎君著

世界的研究に基づける 日本太古史

全二冊　洋裝菊判　上製美本

紙數　上卷七百五十四頁　下卷九百七十頁

上卷金貳圓　小包料拾貳錢

下卷金貳圓拾錢　小包料拾貳錢

上卷目次概要

總論＝本書著作の由來と論述の順序

●第一編　神話比較

▽第一章　天地開闢△第二章　おのころ島▽第三章　火神迦具土▽第四章　伊邪那岐命の黄泉國行き▽第五章　伊邪那岐命の禊祓▽第六章　天照大御神の御生誕―世界三分統治▽第七章　尙武護國の天照大御神▽第八章　天照大御神の御子▽第九章　天照大御神の岩窟隱れ▽第十章　須佐之男命の大蛇退治▽第十一章　大國主神▽第十二章　酒神少名彦名神▽第十三章　豐葦原の瑞穗國▽第十四章　大國主神は猶太教のヨセフなり▽第十五章　國典中の奇蹟とモーセの奇蹟▽第十六章　神典觀同の世界的價値及猶太關係▽第十七章　耶蘇教は酒神ザヤニソス教の變形▽第十八章　耶蘇教の美麗なる觀念眞大なる思想は日本に起源す

●第二編　言語の比較

▽第一章　總論▽第二章　神代文字―片假名の起原▽第三章　發音及び音變化の法則▽第四章　言語對照表▽第五章　言語比較の例證▽第六章　風俗及び趣味上の日本と希臘との比較▽第七章　人種學上宇和島の提供せる無類の材料△第九章　言語比較の結論

□博文館發行

東京帝國大學文科大學教授

文學博士箕作元八君著

西洋史新話

全部凡十冊　菊判　美製上製　地圖及密畫挿入

正價金五拾五錢　郵稅金八錢

第一冊　ギリシアの擾亂

本書はペルシアの遠征に對抗せんとするギリシア當時の情勢より、アテネの英傑テミストクレスの生立、經綸に說き至り、東西兩軍の戰況、テロス同盟の成立を叙しアテネが海上の霸業を爲すに及ぶ。叙述詳明、行文平易、而かも其の間紙背を貫く博士獨得の史的炯眼を見るべし。

第二冊　テーベの勃興

正價金五拾五錢　郵稅金八錢

テーベの物興史は、波瀾幾重奇變續出學ぶべき多くのものを示すと共に、又小說的興味の橫溢せるを見る。往來讀書界を騷がせし彼の「經國美談」は此の事實を小說にしくめるものにして、此の篇は又彼の「經國美談」の實錄とも稱し得べし。而して博士が熱到にして流暢なる叙述は、此の興味ある事實を、如何に愉快に讀者の前に描出し來れるかを思へ。特に其の或る章に至りては、讀者期せずして感興油然、血湧き肉躍りて事實眞に小說よりも奇なるの歎なくんばあらざるべし。

□博文館發行

ドクトルオヴフイロソフ井一

三上正毅君著

獨逸帝國

（最新刊）全一冊洋製菊判上製紙數三百八十頁　正價金壹圓貳拾錢　小包料金八錢

（石版刷地圖並口繪數葉挿入）（博文館發行）

本書は久しく同國に滯在して、上下の事情に精通せる著者が、其實地の觀察と、歐米諸大家の著書、新聞雜誌、其他の正確なる材料に基き、同國の現狀を描寫批評したるものにして、政治、經濟、外交、陸海軍より、文學美術風俗習慣に至る迄、細大洩すことなく、其長所も、短長も、炳焉、是を掌上に見るの感あり。若夫れ、精銳無比を以て、稱せらゝ同國陸軍部內の腐敗を暴露せるが如き、人をして寒心戰慄に堪へざらしむるものあり。思ふに前途に遼大の希圖を懷ける、日本國民たるもの、歐洲の新興國民に就て、學ぶべき所、啓發すべき所、極めて多からん。乃ち本書は我國民刮目必讀の書なりと云ふを防げざる也。

法學士　須崎芳三郎君著

露國侵略史

特製正價金五拾五錢　小包金拾貳錢

並製正價金四拾錢　郵稅金八錢

總領事

奧田竹松君著

佛蘭西革命史

全一冊菊判美本　紙數四百四十四頁　正價金七拾錢　郵稅金八錢

佛蘭西革命は獨り世界近世史中の最大史實たるのみならず實に振古以來未曾有の最大史實たり。十八世紀の舊天地より世界の根軸を轉かして之を現代の新天地に移つし得たる大史實たるなり、又耶に其の外觀內容に於て悲絕悲絕又慘絕を極むるのみならず、後世に及ぼす影響の者大なるより觀て之を近世史に於ける大分水嶺なりと云ふを得べし。古へを稽へんと欲する者は佛國四革命を知らざるべからず、新らしきを知らんと欲するものは亦因より佛國四革命を知らざるべからざるなり。

文學博士　坪井九馬三君閲
文學士　堀竹雄君
文學士　竹村昌次君著

露國の實相

全一冊菊判上製美本　紙數二百二十頁　正價金七拾錢　郵稅金拾錢

（博文館發行）

學博士井上哲次郎君校閲

東京高等師範學校講師文學士有馬祐政君
國學院大學講師黑川眞道君　共編

國民道德叢書

各篇目次

全三冊　菊判上製　紙數　第一篇六百四頁　第二篇七百三十六頁　（第三篇未定）
版美本

第一篇　正價金壹圓　第二篇　金壹圓五拾錢　小包料各金拾貳錢

第一篇（既刊）

卷首（口絵寫眞版八頁。神勅。神武天皇即位詔。八紘神宮。大化改新之詔奉答。教育勅語○中朝邪實○大日本史○中興鑑言（打開）○創學校啓○國意考（試加茂眞淵國意考○辨國意考○國意考辯妄○源和彦○三芳城長○直毘靈○玉くしげ○くすはな○臣道○道鑑佐喜草○國基

第二篇（既刊）

卷首（黎德太子憲法。憲法發布詔勅。著者肖像及筆跡○神道大義○靖獻遺言○同講義○保健大記○告志篇○下學雜言、新論○古道大意、入學問答○在學要○時文癡批○禁談巷○古學大意○馮那備の廣道

第三篇（近刊）

卷頭（章人勅論。戊申詔書。教育三ヶ條。神敎綱領）○學範○知命記○心柵○賴山陽日本外史論文○取捨問答○經義大意○弘道館學則○顯幽順考論抄○和文天聯正氣歌○大統領○國體總論○玉鉾物語○三條大意抄○正氣歌○留魂錄

文學博士　姉崎正治君著

南北朝問題と國體の大義

全一冊　四六判百十二頁
正價金廿錢　郵稅四錢

衆議院議員島田三郎君序

駐米英國大使セームス、ブライス君著

文學士内ケ崎作三郎君譯

虞翁論

附愛兒に與へたる書翰

全一冊　四六版南京綴　紙數百九十四頁　正價金卅八錢　郵稅金六錢

虞翁は政界の偉人也。人道の篤者也。其名望と功績とは共に是れ邪人の夙に聞者するところ唯其人格の巨細と詳細を詳悉する者に至りては益し鮮少なるべく解者の之れを惜む事久し今や翁の祖國に遊ぶに當り切々の宿志は則ち學窓の閑餘発て母國有志の人士殊に青年諸氏の劉覽に供する所以なり。

文學士　土井曉翠君著　（全一冊四六版上製紙數三百十七頁）

◉ナポレオン性格論

正價金五拾五錢
郵稅金八錢

高山仰ぐべく英傑欽すべし此書かの絶大偉人の眞面目を描寫し心地を解剖して委曲周匝を極む彼の駭絶の智力駭絶の手腕又其恐るべき性情其惜むべき暗黑面皆手に取る知くに紙上に現る此書を讀て心靈の鼓動を高めざる青年は「ナタチン」の最上乘なるもの也。

（口博文館發行）

I. The Summary.
II. Problems omitted in my present work.
III. Geography of 'Man-yō poetry' and '*Utai* books'.
IV. When the present island Japanese history begins?
V. Errors in the methods of the old schools of history.
VI. The significance and consequences of my new discovery concering the historical and philological investigation.

博文館發行

帝國百科全書中歷史書類

執筆專門大家各卷好評重版

●世界文明史　文學博士 高山林次郎君著
●支那文明史　白河文學士 國府犀東君共著
●日本文明史　文學士 大町桂月君著
●印度文明史　文學士 常盤大定君著
●日本歷史　文學士 常盤大定君著
●西洋歷史　文學士 吉國藤吉君著
●東洋歷史　文學士 幸田成友君著
●朝鮮史　文學士 久保天隨君著
●北米合衆國史　法學士 山本信博君著
●日本風俗史　文學士 坂本健一君著

●最近外交史　法學士 原田豐次郎君著
●世界殖民史　法學士 山內正瞭君著
●露國侵略史　法學士 須崎芳三郎君著
●現代露西亞　法學士 須崎芳三郎君著
●支那文學史　文學士 笹川種郎君著
●日本文學史　文學士 林森太郎君著
●世界文學史　文學士 植本忠夫君著
●英國文學史　栗原文學士 薩澤文學士共著
●日本文章史　文學士 大町桂月君著

洋裝菊判美本製本並製二種紙數各冊三百頁以上　並製 正價 金四拾錢 郵稅各冊金八錢

特製 正價 金五拾五錢 小包料各冊金八錢

I. The expansion of Japanese influence, westward (from Egypt).

II. Troglodytice, Immundus in South Egypt—the temple of Cepheus (='*Kci*' in 'Kojiki'.=Emperor *Tiuai* the son of *Iamato-Thakel*=Linos of the Grecian mythology, =the husband of Cassiopia).

III. The Emperor *Tiuai's* journey on the Ethiopian coast.

IV. The emperor goes to Ælana, and crosses the Isthmus of Suez, to go to Peloponnesus ('*Kumaso*'=Κυμνατώσω) to chastise them.

V. From Egypt, He goes to *Oka* of Ægina island, Greece.

VI. He then goes to Cassopia (*Casii* [Jap.]) of Epirus. There the Emperor dies; the Empress Jingō, then pregnant, becomes Regent.

VII. The Empress goes to Peloponnesus to chastise them.

VIII. The Empress returns to Cassopia, and adores the God of Dodona. There her Gods teach her to invade into Italy.

IX. The preparations.

X. Gods teach the Empress, that, there is a land of "female's delicacy" in the opposite coast—that is "Calabria" of Italy.

XI. The Empress' fleet sails westward. (In the description of this expedition, all the name and meaning of Italian countries and peoples are to be read.)

XII. The river Arinare (Arenaria).

XIII. The names of the three Kings of the Tarquin family are mentioned in our history.

XIV. The Empress returns in triumph to Cassopia—There the Crown Prince *Ōdin* is born—their return to Egypt.

XV. The description of Tarentum found in our history.

XVI. Subjugation of all the northern countries of Italy.

XVII. All the Alpine countries subdued.

XVIII. The Trans-Alpine—the Cognac land described.

XIX. Gallia tributes the cognac wine to the next Emperor, *Ōdin*.

XX. "How is *Mimana* (Mimallona=Macedonia)?"—the author's question against historical geographers of old schools.

XXI. The so called Three *Kala* (three Gallia).

XXII. The date of the Empress *Jingō*.

Chapter XII.

The week days are the Memorials of Japanese Gods and Godesses — The historical relations between the Japanese and the Scandinavians.....935

I. Wednes-day, Thurs-day and Fri-day are the memorial days of our Emperor *Tiuai* (Thor), Empress *Jingō* (Furia), and Emperor *Ōdin* (or Woden).

II. Sun-day, Mon-day, Tues-day and Satur-day are memorial days of the Goddess *Amaterasu* (Athena), God *Tuki-yami* (<Duci-Europe=Hermes), God *Izanagi* (Zeus), and God *Susanoo* (Perseus and Heracles).

Chapter XIII.

Conclusion—"Japanology" as the science of the Unification of mankind.....949

IV. The Prince in Oman, Arabian.
V. At Ormuz Strait.
VI. The Prince goes to the river Mekong, Combodia.
VII. To Tibet—northward.
VIII. Returning route—toward Indo.
IX. The Prince at Mahabharata (= Indabara = Delphi = '*Saca-ori*' in Japanese history).
X. At the Choatras mountain Assyria.
XI. The Prince Despatches his general in another way.
XII. The Prince crosses the plateau of Pamir toward the east.
XIII. The land of the Princess *Miazu* (<Measure [E] = 'large cup' = Oxyartes) Sogdiana. [This Princess answers to Roxana of Alexander the Great. We see that the life of Alexander the Great is Compiled from the life of Apollo (*Iamato-Thakel*) and Bucchus traditions; so the life of Alexander is discreditable in most part].
XIV. The Prince climbs the western part of the Himalaya mountains.
XV. The Myth of Bellerophon.
XVI. The return of the Prince.
XVII. The Song of "the Great Oak Tree" which overshadows the whole world.

Chapter IX.

The Christian era as the Memorial of the Japanese Sacred vessel (divine 'Pidax' or Crater's) [CONT.]

secrated in the Temple of Ethiopra (after a long search of the best place.) 807
I. The coincidence of the date—is it merely a chance?
II. The "Book of the Prince *Iamato-Hime*" which describes a journey in question, is genuin.
III. Geography of that journey.
IV. The date of the Sacred Crater's settling and the Christian era.

Chapter X.

The beginning of longitude and latitude.—Naming of Sudan and Congo, Africa. 826
I. Hiera-Sycaminos—the Capital of the emperor *Jōmu*.
II. Æthiopia, the central part of the Old Japanese dominions.
III. The origin of longitude and latitude.
IV. The naming of Sudan and Congo.
V. The mount Dashan of Abyssinia is the standard mountain.
VI. The description of the mount Dashan in the Japanese Song-book (*Utai*).
VII. The land of Fudo(Putho)-myth—Æthiopia and Abyssinia.

Chapter XI.

Invasion into Italy of the Empress Jingō-Kōgō (= Jingō or Jangoikoa > "Jingoism." = Godess Cassiopia.) 840

IX. The description of Agimatha ('*Ajimasa*' in 'Kojiki') on the river Menam, Siam.

X. The Old names of the islands Java, Sumatra and Borneo are Japanese words.

XI. The 'Homti-be' means Homeritae, that is hotel or hospital.

XII. Prince *Toio-Asakla-Akctaz* in 'Kojiki'—is Askla-pios, the god of medicine.

XIII. The oldest origin of the Red-Cross and the word 'hotel' is in old Japan—Egypt-Arabic.

XIV. The latter half of the Prince *Homti-wake's* life—Truth and Salvation.

Chapter VI.

Prince Homti-wake of 'Kojiki,' Hamlet of 'Shakespear,' and Conrad, the Corsair, of 'Byron'—the same person. 684

I. Compilo Glorioso!

II. Names of personages—the same.

III. The family relation of *Homti-wake* and of Hamlet—the same.

IV. The Dumness and the Melancholy of *Homti-wake* and of Hamlet—the same.

V. The Pythian ship and the Pirate ship—the same.

VI. The signification of the names of two attendants of *Homti-wake* and of Hamlet—the same.

VII. *Kii-Satumi* (Cheiron-Satyrorum) of 'Kojiki,' and the Centaurus of Shakespear—the same.

VIII. Princess *Hinaka* (= *Hidaka* or *Kiyo-Hime* < γέω, δμῆν

becomes a Serpent, and 'Ophelia' of Shakespear means 'serpent.'

IX. The invation of the enemy by firing the enemy's palace—'Kojiki,' 'Hamlet,' 'Corsair'—the same.

X. The idea of the 'Red-hand' is same in both of 'Kojiki' and Byron's 'Corsair.'

XI. *Mutura-Sayo-Hime* (*Sabo-Hime*) in 'Kojiki' Soppho of Grecian tradition, and Medora of Byron's 'Corsair'—the same.

XII. "The pearl in the goblet" is the same in 'Hamlet' and 'Kojiki.'

XIII. 'Hamlet' and 'Corsair' traditions originated in Egypt-Arabia-Indo-Japan.—In truth 'Hamlet' is not the real person in history of Denmark.

Chapter VII.

The Emperor Keikō (Osarphis in Egyptian history) travels through Greece. 708

I. Heliopolis of Egypt, and Cabura of Afganistan.

II. The description of the west Coast of Arabia in 'Nihongi.'

III. The journey of the Emperor through Greece.

Chapter VIII.

Paince Iamato-Thakel. 732

I. Prince *Iamato-Thakel* (Ἰαματο-, θαρσηλος) is identical with Apollo.

II. The eastern invation of the Prince.

III. Heliopolis (Hisiro)—the starting point.

Chapter II.

Suizin, the next emperor changes the capital from Mecca to Medina, and then Phacusa, Egypt.....579

I. The land of *Sabo* (=Saba=Seoba) The queen of the emperor *Suizin*.—Arabia and Egypt.

II. Medina.

III. Augustamnica, Egypt.

IV. Phacusa.

Chapter III.

Hipparchos and Aristarchos visiting, Egypt-Japan....587

I. Two great astronomers.

II. *Hiboko*, in Japanese classics, is Hipparchos, the astronomer.

III. The descriptions of his birth place in Japanese classics, may be identified with that of the western record.

IV. So called precious treasures, brought by *Hiboko* (Hipparchos), are figures of astronomical constellations.

V. Names of constellations described in Japanese classics.

VI. Geography of *Hiboko's* wandering.

VII. The date of *Hiboko's* visit, and the question (as to whether he went to Alexandria or not).

VIII. Aristarchos is represented by the name of *Aristi-Kanki* in Japanese history.

Chapter IV.

Myth of the Queen Sabo (Saba) and its geography —Southern Egypt.....621

I. The rebellion of *Sabo-hiko*, the elder brother of the Queen *Sabo*, and the Myth of the Queen and her son *Homti-wake*.

II. The Sojourn of the Emperor *Suizin* at *Taka-miya* of *Kume* (Kummeh of Southern Egypt).

III. The land of *Sabo-hiko*—Sabo of Southern Egypt.

IV. Another geographical explanation concerning the Myth of the Queen.

Chapter V.

Prince-Homti-wake.....629

I. Eastern expansion of Japanese influence.

II. The First half of the Prince *Homti-wake's* life.

III. Pythian ship—The Pirate.

IV. Pythian ship on the Arabian Sea and the Indian Ocean.

V. The 'Cygnos' flies through the western and central Asia from Egypt-Japan.

VI. Prince *Homti-wake* visits Siam and Cambodia by the sea.

VII. How the auther of this book came by these suggestions?

VIII. Descriptions of the river Mekong and "Cheiron-Satyrorum" (Sagittarius in astronomical constellation) in Japanese history.

VII. The mummy of the Japanese Imperial family, is now in the British Museum.
VIII. Dates of these Emperors and Kings are uncertain.

CHAPTER III.

CAPITALS AND TOMBS OF EIGHT EMPERORS AFTER *Jimmu* IN GREECE. 535
I. Worthlessness of old investigations.
II. The Capital and the tomb—of the second emperor *Suisei*;
III. Of the third emperor *Annei*;
IV. Of the fourth emperor *Itoku*;
V. Of the fifth emperor *Kōsiō*;
VI. Of the sixth emperor *Kōan*;
VII. Of the seventh emperor *Kōrei*;
VIII. Of the eighth emperor *Kōgen*.
IX. Of the ninieth emperor *Kaika*.

CHAPTER IV.

THE IDEA OF THE UNIVERSAL MISSIONARY OF THE EMPEROR SUZIN—THE ORIGIN OF MISSIONARIES.....549
I. The meaning of *Mi-Maki-iri-hiko*, the emperor Suzin —the "priest of Bucchus."
II. Geography of Acarnania and Eurytanes at the time of the Emperor *Suzin*.
III. The Despatching of the four Missionary Generals—the origin of missionaries.

CHAPTER V.

EXPANSION OF THE JAPANESE INFLUENCE TOWARD EGYPT AND ARABIA.....562
I. The Despatching of princes and imperial families in several directions.
II. Frequent occurrences of geographical names of Egypt and Arabia, in this part of Japanese history.

PART V.

HISTORY AND GEOGRAPHY (III)

(Arabian and Egyptian Period)

CHAPTER I.

EMPEROR SUZIN'S CAPITAL MECCA.....566
I. Changing of the Capital to Mecca [from Greece].
II. Proofs from descriptions of *Idumo* (Edom) and Mount *Mi-molo* (—?).
III. Two Princes of the Emperor *Suzin*—*Toyoki* (=Towyek) and *Ikma* (=Felix).
IV. The Relations between Arabians and Scythians.
V. The name of the Emperor "*Mi-Maki*" (Suzin) and "Mecca"—the same etymology.

VIII. Ancient Japan of the Far West is Morocco—A conclusion of the Mythical history of Japan.

PART IV.

HISTORY AND GEOGRAPHY (II)

(Grecian Period)

CHAPTER I.

THE AGGRANDIZEMENT OF THE HEAVENLY WORK BY THE FIRST JAPANESE EMPEROR, *Jimmu*.—"THE RETURN OF THE HERACLIDAE" TO GREECE. 423

I. The holy intention of the Universal Empire of Emperor *Jimmu*. ['*Jimmu*' is the throne title; his real name is *Iuale-hiko* (=Iule-us of 'Æneid')].

II. The Emperor *Jimmu* in the world History.

III. The difference in geographical descriptions between 'Kojiki' and 'Nihon-gi.'

IV. The starting point of *Jimmu's* eastern expedition was Abyla in Morocco, Africa.

V. The strait of *Haiasui*—the Phaiacian Strait of old, is the Malta channel.

VI. From the landing of Acarnania to Chalcis of Aetolia.

VII. From Naupactus to Phæsus—Locris-Ozoris' Shore.

VIII. From Locris-Ozoris to the mountainous region of Doris.

IX. The Entry into Octa—The battle fought facing 'West-Ward.'

X. The Preparations for the Eurytanean Battles.

XI. The Battles of Aeneanes and Eurytanes.

XII. Into Thessalia.—*Umasi-Mate* (Ommasi-Melite) Surrenders.

XIII. The Remaining Foes.

XIV. The visit to Dodona, Epirus by the Emperor.

XV. Several Epithets of 'Japan."

XVI. How the Old Testament describes the Old Japanese People—'Javan' in 'Genesis.'

XVII. Abyssinia-Japan.

CHAPTER II.

INAI, THE BROTHER OF THE EMPEROR JIMMU, AS THE FOUNDER OF THE ROMAN EMPIRE; MIKERINO, ANOTHER BROTHER, AS THE PYRAMID KING OF EGYPT.....516

I. Æneas, the founder of the Roman Empire, is to be identified with *Inai* (Æneae), the Imperial brother of *Jimmu*.

II. The description of the tempest on the sea of *Kumano* in Japanese classics, is to be identified with the voyage of the Sinus Cumanus of 'Æneid.'

III. Japanese classics call *Inai* (Æneas), the '*Sabi-moti*'—That is the same as Sabinus, the Æneau race.

IV. Japanese classics call *Inai* (Æneas) the founder of *Silaki* (=Scyllacius=Italy) 'Æneas' of the Rome.

V. *Mikerino*, another brother of *Jimmu*, was identified with the Pyramid King Mycerinos of Egypt.

VI. The Pyramid of Gizeh and *Mikerino*.

Chapter XV.

Geography Concerning the Descension of the Heavenly Grand-son; Taka-tiho—Mount Othrys, Greece 339

I. Mt. *Taka-tiho* is not found in the present Japan.

II. Two *Toka-tihos.*

III. The '*Mizuho* Country of *Toio-Asihala*' means 'Thessalia, the Musaios Country.'

IV. *Taka-tiho* is Mount Othrys, Greece.

V. Mythological grounds of Mount Othrys in my judgement.

VI. The route of the descending Heavenly Grand-Son.

Chapter XVI.

The Trip of the Heavenly Grand-Son to Chalcidice—The birth of the three Phoenix Children,.....355

I. A trip of the Heavenly Grand-Son.

II. The route of the trip.

III. The land of the Princess Chalcis.

IV. The birth of the three sons—the representative three Hellenic races.

Chapter XVII.

The Trip of Hikohoho-demi (Hippo-demus) to the abode of the Sea-God—Geographe of the North African Shorse 365

I. A myth of *Hikohohodemi* exchanging his fortunes with his elder brother.

II. The land of *Hikohohodemi*—is the land of Hippo, the west of Carthago, Africa.

III. By-proof from the myths of the wandering of Ulysses and Æneas.

IV. The wandering of Ulysses to the Phaiacian land, compared.

V. A visit of *Hikohohodemi* to the Sea-God's abode.

VI. Return of *Hikohohodemi* and of Ulysses, Compared.

VII. The Four words of curse against the elder brother of *Hikohohodemi*, and the four Geographical names of the African Shores.

VIII. A Comparison with the ship-wreck of Ulysses.

IX. The description of the Princess "Sacred-flower" in this Part of Japanese classics—and that of to the Queen Calypso of 'Odyssey', and the Queen Dido of 'Æneid'.

X. *Taka-tiho* again.

XI. The tomb of *Hikohohodemi.*

XII. The origin of the idea of the 'Cross' is dated before Christianity.

Chapter XVIII.

U-gaia-fukiaez (Urano-gaia-Phorcys=Atlas)—the North Western shore of Africa.....407

I. The birth of *U-gaia-fukiaez* (Atlas).

II. The meaning of "*U-gaia-fukiaez*"—is the upholder of heaven and earth'.

III. The description of *U-gaia-fukiaez* in Chinese Classics.

IV. Geography concering *U-gaia-fukiaez* (Atlass).

V. *Abila*, the tomb of U-gaia-fukiaez—is Abyla or Abila of Morocco.

VI. The Princess *Tama-Iori*—is the Goddess Thauma-Iris.

Chapter XI.

Gods Skuna-hikona (Schoenus), Ō-Mono-nusi (Great one God), and Thoth (Hermes) 258

I. The Coming and going of *Skunahikona* and *Ō-mono-nusi*.

II. *Skuna-hikona* and *Ō-mono-nusi* are one and the Same Wine God—'The light of Gospel'

III. The said two Gods and the God Thoth.

IV. The origin of the idea of the Savior in Christianity.

Chapter XII.

The Birth of the Heavenly Son and Grand-Son...271

I. God's dearest Son given to mankind.

II. The God *Musaka-Akatu* (Muska-Acamptis—Geographical names of Asia Minor) and Bacchus.

III. The propagation of the principles of Salvation by the Wine-God.

IV. Descension of the Heavenly Grand-Son.

V. The meaning of the name of *Hikohono-ninigi*, the Heavenly Grand-Son—Ἱππό-νεανικός.

VI. '*Ama's Hidaka*' (πεδιακος) means 'heavenly' spring.

VII. The word '*Ogisi*' means the 'Orgies' of Bacchanals.

VIII. '*Himologi*' and '*Iwasaka*' of Ame, is the Evangelia of Heaven.

Chapter XIII.

Indo is the Settlement of the Japanese divine Ancestors. Sakya-Muni-Buddha is the Transformation of our Armenian Heavenly Son or Grand-son.....298

I. Indo is the Settlement of Japanese race from the west (Armenia).

II. Sakya-Muni-Buddha is the transformation of our Armenian Heavenly Son.

III. Sakya-Muni 'Buddha' is the incarnation of Grapes—(Japanese word *Buddhō*)—the Buddhistic bell as the wine Cup hung up-side down.

IV. The Japanese word '*Hotoke*' meaning Buddha means 'Grape-born.'

V. A few notices to the Buddhistic Student.

VI. Conciliation and unification of all the religions in the world.

Chapter XIV.

'Iata-no-Kagami'.....314

I. The Most Sacred treasure in the world.

II. Old investigations.

III. Speculations of the "Iata-no-Kagami" by means of its outward cases.

IV. The *Iata-no-Kagami* is a thing belonging to Bacchus.

V. The *Iata-no-Kagami* and wine vessels.

VI. The *Iata-no-Kagami* is not a plane mirror.

VII. Descriptions of *Iata-no-Kagami* in the 'Heike-monogatari', and the 'Arabian night.'

VIII. Many names of '*Kagami*'—*Hiboko* (Hippokrene), *Hizaki* (Pidax), and *Kunikakasi* (Concavus).

IX. A mystery of the adorning three branches of the Sacred tree.

Chapter VII.

Geography of "Lustration" of the God Izanagi—and Gods born in Consequence of Lustrations.....145

I. Geography of Lustration.

II. The strait *Aha* and *Haiasui*, where the God Izanagi visited with the aim of Lustration—is relatively the Strait of Africa, and that of the ancient Phaiacian or Malta Strait.

III. His return to Attica, Greece.

IV. Lustration held at Ægila, near Thorai, Laurium, Attica.

V. Gods born in consequence of Lustration—(1) Gods of Athens and the neibourhood.

VI. (2) Gods of the Sicilian Shore.

VII. (3) Gods of the Mediterranean Shore.

VIII. (4) Gods of the Sea. (5) The three highest deities—Goddess *Amaterasu* (Athena), God *Tuki-Yomi* (Hermes) and God *Susanoo* (Saturn). And the dominions of these three deities correspond each with Asia or Armenia, Europe and the Mediterranean Sea.

Chapter VIII.

Geography Concerning the three Godesses of Muna-kata (Mounychia) 180

I. The land of the three Godesses of *Muna-kata*—Peiraieus, Attica.

II. *Usa-jima*—the land on the River Asopus, Attica.

III. *Muna-kata* or *Minuma* is Mounychia.

Chapter IX.

Historical Geography Concering the God Susanoo (Perseus and Heracles in one Person) and two Celebrated Swords.....188

I. Susa of Persia and the God *Susanoo*.

II. Mt. *Mogali* related with the God Susanoo—is Mount Apocopa of Indo.

III. *Hi-no-Kawa* (River Hi) of *Idumo*—is River Nile of Egypt.

IV. *Idumo*, *Aki* and *Kibi* in Japanese Classics is Edom, Ægyptus, and Chemi relatively.

V. *Kibi* (Chemi) and *Kosi* (Cush) of Ægypt and Persia.

VI. "Japan is the hottest Country in the world"—"Egypt-and-Abyssinia-Japan."

VII. The God *Susanoo* (Meaning lily = Perseus) and the land of Gaul ('lily') and Italy.

VIII. The Christianity before Jesus Christ.

IX. The tradition of Cain and Abel is originated in the Susanoo families in Old-Japan.

X. Two famous Swords in the world.

Chapter X.

Geography Concerning to the God Ōkuni-nusi (Judaean Joseph) 245

I. *Idumo* and *Inaha* = Edom and Inacha (Egypt).

II. The Promontry *Keta* = Chetam or Pelusium.

III. Other geographies.

IV. Geography of *Tokoio* (Τοξον, *loi*) = Erythrean land.

III. A Description concerning Paphragonia, Cappadocia and Pontus.

IV. The Ascanians or Mysians are '*Umasi-asi-gabi-hikoji*' (Ὅμμασι, ἄρσις, -γαιή-οχος) in Japanese classics.

V. Geography of Asia Minor, Germany, Dutch, and Scotland Concerning the God *Kunidokotati* (=Conductus =Hermes).

VI. God *Toio-Kumonu* (Theos, Communis=God of the Commerce) and Denmark.

VII. Other Gods and other geographical names.

VIII. A description of the Lake Thospitis or Van in Japanese Classics.

CHAPTER III.

GENESIS OF JUDAISM AND CHRISTIANITY IS ORIGINATED IN JAPANESE CLASSICS 72

I. Japanese Cosmogony and Judaean Genesis—the Same.

II. Neo-Platonists and John the Apostle, are adorators of the Japanese God Kunidokotati (=Conductus= Hermes=Logos—*Kan-Logi* [Jap])

III. The *Ame* (Heaven) of Japanese Classics is the Eden of the Bible.

CHAPTER IV.

GEOGRAPHY OF THE "LAND-BEGETTING" MYTH..... 90

I. Geography of the "Land-Begetting" Myth has no connection with the present Japan of the Far East.

II. So called *Onokolo-jima* (Omphalos island) in Japanese Classics, is the Delos island in the Ægacan Sea.

III. *Hilko* (Helicon) = Egypt. *Aha-Sima* (<Aphra) = Africa.

IV. *Honosa-Wake*=Phoenicia.

V. The land of *Io-no-Futana* (Pythiana of Io) is the Ionian land, in the western Asia Minor.

VI. Island of the three sons of *Oki* are Melos islands.

VII. *Ticusi*=Atticus (Greece)

VIII. *Iki*=island Leuci. *Tusima*,=Corcyra of Greece. *Sado* =Sallentini of Italy.

IX. Great *Iamato* ('Ιαματος—another name of Japan= 'Javan' in the Old Testament)—is the Danube regions.

X. Other islands in the "Land-Begetting"-myth—The islands of Italy.

XI. The Summary of the "Land-Begetting"-myth.

CHAPTER V.

GEOGRAPHY OF THE BIRTH OF GODS 123

I. Gods of Asia Minor in Japanese Classics.

II. Gods of Italy and Sicily.

CHAPTER VI.

GEOGRAPHY OF HADES.....131

I. *Idumo* (the 1st Idumo=Edom) in Japanese Classics is Boeotia of Greece.

II. *Hōki*=Phocis of Greece.

III. Mt. *Hipa*, where the Godess *Izanami* was buried is Mt. Hypata in Boeotia, Greece.

IV. Slope *Hira* of Hades is the slope of Mount Hyria of Boeotia.

CONTENTS.

PART III.

HISTORY AND GEOGRAPHY. (I)

(Mythological Period)

Chapter I.

Of the Historical Geography of the Antique Japanese People..... 1

I. A refutation of the importation theory of our myth and language.

II. The weakness of Japanese historical geographers of old schools.

III. The Bankrapsy of the old schools of Japanese historical geogrophy.

IV. A few notices on reading maps.

V. An account of my new discovery of the dominions of the Antique historical geography of Japan.

Chapter II.

Geography of Ame (Heaven) in Japanese Classics—Asia Minor..... 36

I. *Ame* (Heaven) of Japanese classics is Armenia, Asia Minor.

II. The Hittites in Japanese classics.

present island, accounts well for the coincidences or identities discovered between the history and literature of the East and those of the West.

Yes, our mythology is the same as that of Greece, and the proper names of the former correspond exactly with those of the latter. Our history has those coincidences which have been aforementioned. It is surprising to find that the Japanese History contains such names as Aristarchos and Hipparchos, the famous astronomers of old, and the names of the constellation as well.

Our Genesis when recited in Greek or Latin pronunciation will sound much like Jewish Genesis. Thus the legend of Moses getting through the Red sea will reveal itself as the modification of a Song "*Mekari*" in our Song-book (*Utai*).

The idea of the "Peaceful Unification of the world" and "Divine Government" conceived and promulgated by the Prophets in the Old Testament, is derived from the Prayer-books of ours—"Notto" which are read at temple by "Shinto" Priests. The fact is, I suppose, the Jews sojourned in Egypt when our ancestors were there, and they got this idea. If not, they might at least have had it imported from Alexandria at a certain later period.

Jesus of Nazarene was indeed a man in a fiction, and not a man in real existence. His life is a mere tradition compiled out of the myths and legends of the "Greco-Japanese,"—chiefly the history of the "Descension of our Heavenly Grandson."

Such being the case, my new study will not only enlighten the historical researches of the Ancient Japanese, but will also throw an unexpected light on the Ancient Histories of Western countries (and of China as well as of Indo).

So this new comparative study of mine in conformity with the world-wide standpoint, might well be called the Key to the Ancient History of the World.

Let it be my present attempt to announce my new study which is, however, still in embryo. May the opportunity be granted me for publishing the complete translation of my present work and thus making myself open to the public criticism all over the world.

February, 1912. Tokyo.

T. KIMURA.

the legends of Christ and Mahomet, and the history of Demmark. Don't ask me Why. Wasn't all this originated in the Japanese history in its Arabian period?

In the following stage, our history mentions the name of the Emperor "*Osiro-wake*" whose capital was Heliopolis in Egypt (Hisiro [Jap.]=Hesiris [Egypt]; *Osiro-wake* [Jap.]=Osiris [Gr.]).

In the life of this Emperor's prince whose name was *Iamato-Thakel-Nomikoto* (Ἰαματός, θαρτέλος, νομικός) we find the accounts of his Eastern Expedition. By the geographical study in connection with those accounts, we learn (1) that the Prince left Heliopolis and conquered all over the continent of Asia, (2) that the Prince was the identical god with Apollon in the Grecian Myth, and (3) that the great part of the life of Alexander of Macedonia is a mere revision of the same.

The next Empere *Jōmu* took up his abode at Hiera Sycaminos in the Southern part of Egypt, so says our history.

The life of the succeeding Emperor *Tiuai*, son to "*Iamato-Thakel*" or Apollon, contains the accounts of Ælana in Arabia, and suggests us Linos in the Grecian Myth. The geography of this Emperor's journeys furnishes us the accounts of Egypt, Ethiopia, and the Arabian coast.

Jingō, Empress consort to *Tiuai*, was in fact the Goddess Cassiepe, and conquered *Silaki* (Scyllaci). *Silaki* means Italy. This Empress or Goddess is said to have left Egypt, her home, accompanying the Emperor *Tiuai*,

her consort, for Cassope in Epirus, where the latter breathed his last, which incident compelled the Empress to invade into *Silaki* (Italy) in deference to the revelasion of her Gods.

Our history in this connection is abundant with the names of Italian tribes, and of various states and places. It teaches us also what those names signify and how they came into use. It mentions, moreover, the names of the Three Kings of the Tarquinus house, and states also the incidents occurred in such regions as Alps, Gallia, etc.

The Crown prince of the Empress *Jingō* was *Ōdin* who was no other personage than God Odin revered as warlike Sea-God by the North-men.

Let it suffice to stop here, though my new investigation has already gone further. Not but that I have any other reason than my humble conviction that the historical geography above mentioned comprises the largest possible range of the geography in our Ancient History, and forms a guiding light for any would-be scholars who may wish to make a fresh start with a new idea in view.

Indeed my present work is nothing more than a part of the Ancient History of Japan, but it is none the less true that the same is sufficient enough to show our ancient field of action was not island Japan of the Far East.

The alleged fact that our ancient land was not our

seas as well as on that of Maley, and reaches as far north as Turkestan and Thibet.

A close application in your geographical study will teach you (1) that our history of the mythological period commenced at Armenia or Eden in the Old Testament, (2) that our history concerning the "Descension of the Heavenly Grandson" forms the first chapter of the history of the "Japanese in their old home—Greece," (3) and finally that our history then moves to a new field of action as far north as the coast of Africa—with Egypt in the east and Hesperia or Morocco in the west.

On entering the next stage, our history leaves the mythological period and proceeds to narrate the Eastern Expedition of our First Emperor *Jimmu* (Real name *Iuale-Hiko*; Throne title *Jimmu*). The so called "Eastern Expedition" means the said Emperor's invasion and restoration of Greece which had once been our Father land, but afterward been abandoned temporally for a certain reason. My comparative study in this historical record makes it clear that such events as these should be identified with what the Ancient Grecian History calls "The Return of the Heraclidæ."

Our history in this part mentions the names of the Imperial elder-brothers of "*Jimmu.*" First comes *Ithuse* (Ἰθύς)—namely "Palinurus" in the "Æneid," written by Vergilius. The second is "*Inai*"—namely "Æneas" (Æneæ=Inai), whom our history represents to have been the founder of *Silaci* (Scyllaci=Italy). The third is *Mikerino*—namely the Pyramid King Mycerinos of Egypt,

in whose connection our history gives the accounts of "Gizeh."

According to our history, the Nine Emperors succeeding *Jimmu* lived in Northern Greece—Thessalia, Æneanea, Ætolia, and Epirus. But the capital was removed to Mecca, Arabia (Mecca<Μῆκος) in the reign of "Mi Maki-iri-hiko" (Μῆκος, ἕερος, ἔχω—Throne title Emperor *Suzin*=Zuzim), and the next Emperor "*Ikma-iri-hiko*" (Ἰκμάς) removed to Medina and afterward to Phacusa, Egypt.

Our history of this stage states the fact that one of the Sacred Treasures of our Imperial House—viz. the *Iata-no-Kagami*" (that is the "Crater"=Bucchus's cup or pot) were kept sacred at the temple of Æthiopia, south of Egypt. It was the fifth year before Christ that is to say the first of the Christian era in the strict sense. For I presume the accounts related to the birth of Christ to be a modification of the historical narration concerning the "Descension of our Heavenly Grandson"—who brought the "*Iata-no-Kagami*" from *Ame* (Heaven).

Our classics give us in this connection the accounts of the Prince "*Homti-wake*" (Homti=Homelitæ=Ma-Homet=Hamlet). These historical materials were utilized in what I should call the "Tragedy of Jesus," and constituted themselves a part of the tradition explaining the origin of Mahomedanism, and also are identical with the Hamlet of Shakespeare; and are naturally to be regarded as an adequate material by means of which one may erase or correct some parts of

TO THE READER.

In the first book of my present work I tried to investigate the Japanese mythology and language both on comparative method, to testify them to have been the origin of Grecian, Latin, and Egyptian myths and languages, and to conclude, upon this ground, that the Japanese is the Greco-Latino-Egyptian race. Now I think I can give a more solid ground to my ethnological point of view, by means of another method of study—the study of historical geography in the Japanese classics I mean. Hence the publication of this book.

The oldest books in the Japanese classics which treat the history and geography of the Japanese people—I mean the "*Kojiki*," the "*Nihongi*" the "*Man-yō*," etc. —have hitherto been regarded as historical literatures narrating the events of our present "Island Empire." Nothing can be farther from the truth.

A more strict investigation—linguistic, mythological, historical, and geographical—all guided by a new principle—and a closer comparative study enlightened by a world-wide knowledge, will show that the said literatures are not the histories of our "Island Japan," but those of our people in the Western land—land which has Greek and Egypt for its centre, comprising various countries on the coast of Mediterranean, Arabian, Indian

I-9A20

THE ANTIQUE HISTORY OF JAPAN

OR THE

JAPANESE AS A GRECO-LATINO-EGYPTIAN RACE

BY

T. KIMURA.

AUTHOR OF—*'The History of Oriental Ethics,' 'The History of the Foundation of The Japanese Empire,' 'Amazons, Ancient and Modern, East and West,' 'Æsthetic Morals,' 'Life of Lord Byron,' &c.*

TRANSLATOR OF—*'Dialogues of Plato,' 'Memorabilia of Xenophon,' Byron's 'Corsair,' 'Cain,' 'Mazeppa,' &c.*

IN TWO VOLUMES

VOL. II.

HAKUBUN-KWAN

No. 8. Honchō, 3 Cōhme Tōkōy, Japan.

334
1421